

表6 町方指導者の呼称と天正十五年の伴天連従事者

史料	呼称	頭人	頭分	領分	当人	頭	地頭	町之長	邑長	村長	肝入	別当	乙名	役人	役頭	天正十五年、伴天連従事者
長崎鑑 続長崎鑑A 続長崎鑑B 長崎記：西勝寺蔵 長崎虫眼鏡 長崎鏡 長崎建立并諸記挙要 長崎日記		●	●	●								●				
庫物長崎記 長崎拾芥 長崎始由来記 長崎根元記 崎陽雑記 長崎記原 長崎旧記 長崎集 長崎実記 長崎実録大成正編 長崎実録大成補遺 長崎記：テ131127 華蛮交易明細記 長崎実記年代録 通航一覽		●												●		侍兩人搦 吉利支丹兩人搦 地頭職の者 邪宗門領輩、兩人死罪 邪宗門ニ傾ク輩、兩人死罪、地頭職ノ者 邪宗門領輩、兩人死罪、地頭職之者 地頭職の者 武人搦、 長崎ノ頭人共、追立 邪宗ノ士兩人死罪 邪宗門ニ傾輩、兩人死罪、地頭職之者 邪宗門ニ随ひ新地頭職ノ者 長崎ノ頭人共、無礼ノ事アリ 頭人共追却
長崎港草 長崎名勝図絵		●							●							切支丹宗門ノ侍兩人搦 切支丹宗門の侍兩人搦
長崎略記A 長崎邑略記		●											●			
長崎縁起略記 長崎由来記 長崎之記 長崎記：禿法 長崎略縁起 長崎縁起略A 長崎縁起評 長崎縁起略説 長崎年来記録 長崎縁起 長崎略記会釈 長崎略記B 筑紫長崎縁起 長崎旧記後考 長崎雑記						●			●				●			
町年寄発端由緒書		●					●									

した、③のちの高島了悦本人、とする三つに分かれている。「頭人・町年寄」の家譜を整理した山崎信二氏によれば、高島了悦は天正二年父高島氏春と共に長崎に移るとしている（山崎 2015）。そこで、佐々木が高島の父であったとすれば父氏春が「頭人」であったということになる。金井俊行氏の『増補長崎略史』『長崎名家略譜』によれば、高島氏は「近江源氏佐々木定綱曾孫次郎高信初めて高島氏を称す」とある（金井 1926 P. 559）ので、佐々木氏と高島氏は関係があったことになる。現在のところ、①②③について正否を判断する根拠を持ち得ない。

長崎地誌・旧記類において、「頭人」として挙げられるのは、「長崎略記A」系史料が16名ともっとも多い。総て併せると20名の「頭人」がいたことになるが、平戸屋文知坊が捏造されたとする古賀二郎氏のように「架空の人物」と想定しなくとも、元龜二年(1571)の「町建て」から天正十六年(1588)までの17年の間に、町方の代表として「代り合テ」（『長崎実録大成補遺』）勤めていた延べ人数20名

ほどの「頭人」が記憶されて記録された、と見るのが妥当ではないだろうか。

「頭人」とその合議体である「頭人中」についての歴史的な形成過程があることを、安野氏は想定されているが、「長崎縁起」系史料の『長崎略縁起』と『長崎縁起評』のなかに、戦国末期の戦乱期の「長崎町建て」長崎の「頭人」には、流浪して来た「諸国牢人」と「当地ノ者」があったとされることから、少なくとも①「長崎草創期」の自治都市長崎、②天正八年(1580)のイエズズ会領となった都市長崎、③戦国の戦乱が終結した天正十六年以降の秀吉公領化した長崎、④江戸幕府天領の長崎、と町方指導者のあり方も時代的に変化していったに違いない。

### (3) 町方指導者の変遷

長崎の町方の指導者の呼称については、安野氏が「当処の頭」「処の頭」「頭分」「当人」「頭人役」「肝入」「別当」などと、記録によって呼称が異なっているのは、頭人の歴史的な形成過程が複雑だったことによるのではなかろうか」と指摘されている(安野 1974・1992)。上述したように、元亀二年(1571)の「町建て」から文禄元年(1592)頃までの20年余の間に、「頭人」等の町方指導者が入れ替わり、その呼称についても変化していったことは十分に考えられる。今回の史料調査では、表6に示したように、14の呼称が認められ、そのなかで「頭人」が21ともっとも多い。

「別当」については、「長崎鑑」系史料と、「長崎縁起」系史料の『長崎記：禿法』と『長崎縁起評』に見られるが、「別当」が「頭人惣代」のような職とすれば、白倉如庵・吉岡九兵衛・馬場甚兵衛・須川主水・山本庄左衛門・沼喜田小庵の6名が草創期の六丁町において「別当」を「代り合テ」勤めていたと再評価できそうである。武野要子氏は、元亀元年(1570)に長崎村を襲撃した深堀純賢に応戦したキリシタン土豪の山本バルタザールを、山本庄左衛門と重ねて見ている(武野 1981)。

天正六年(1578)の深堀茂宅(純賢)との合戦記事が、『長崎拾芥』、『長崎始由来記』、『長崎港草』にあり、そこで討ち死にした大将高木惣兵衛と高木勘左衛門という人物が登場する。天正七年(1579)の町方と長崎甚左衛門との合戦では、『長崎拾芥』と『長崎実録大成補遺』に、高木勘左衛門の兄として高木宮内左衛門が登場して、いずれも町方武士として戦っている。山崎信二氏は、高木家の家譜を整理して、高木勘左衛門が高木作右衛門忠雄(了可)で、高木宮内左衛門は兄の高木宗重(了善)として、武芸の伎倆を持つ町方の中心となっていた事を想定している(山崎 2015)。山崎氏の家系図では、高木惣兵衛が康宗ということになり、「頭人」として挙げられている高木新七郎の可能性はあるが、それでは父高木新七郎が天正六年に討ち死にしたということになる。

また、天正七年三月には、(当人中ノ)惣代として須川主水が、信長に会うために上京したが、筑前石坂において賊に遭い殺害されたという記事が『長崎実録大成補遺』、『長崎港草』にある。須川主水は、天正七年の町方と甚左衛門との抗争解決を信長に請願するため旅で出たのであろうか。

天正十五年(1587)には、九州征圧のために博多に出陣していた秀吉に、伴天連が訪ねてきたときに付き従っていた長崎町方の者に無礼があったことで処分を受けたという記録が「長崎拾芥」系史料にあり、表7に事例として『長崎旧記』と『長崎実録大成補遺』の記事を示した。伴天連に従事していた者は、表6から「侍」、「武人」、「頭人」、「地頭職の者」と記された2名の者であり、磔として死罪あるいは追い立てられている。また、長崎の「地頭職の者」が長崎を切支丹寺領として差出す不届きをしているとして、長崎を直轄地とするため藤堂佐渡守を差し向け、翌天正十六年(1588)には寺澤志摩守と藤堂佐渡守を差し下して長崎を見分したとある。これらの記事の書き方を見ていると、伴天連に伴った「頭人」の上位に「地頭職の者」がいるようにも読み取れる。

それまで自治都市長崎のなかで町方によって指導者が選ばれていた「頭人中」の組織が、天正十六年の秀吉の公領化によって解体され、それまでイエズズ会派の重鎮として長崎を支配していたキリシ

表7 天正十五年の秀吉博多出陣地の伴天連訪問に伴う処分等の記事

●秀吉公長崎御公料被召上御條目御朱印并邪蘇宗徘徊御停止御書出之事

・長崎之儀、元龜より天正十五年迄十八年の間、長崎中都而邪蘇宗門ニ令帰依、我意をふるひ蛮夷ノ頭伴天連を主のごとく取持所、秀吉公天正十五年九州ニ御出陣、薩摩義久ヲ御静メ御帰陣之砌、筑前箱崎暫御在留あり、其節彼伴天連長崎より色々献上を仕度し罷出ル所、御供之内邪宗門領輩有之由被聞召被遂御吟味、兩人被行死罪依之伴天連日本渡海之儀向後停止之由被仰出、早速被差帰長崎之儀日域之正道を取失ひ伴天連ニ随ひ剩地頭職之者長崎を切支丹領差出事不届之至り、依之御料ニ被召上為上使藤堂佐渡守被差下、又翌年寺沢志摩守藤堂佐渡守兩人被差下長崎見分有、…… (『長崎旧記』)

●秀吉公被禁邪宗門長崎御料所ニ被仰付事

・天正十五丁亥年、秀吉公為征伐島津九州ニ発向有シ凱陣ノ時、筑前博多ニ暫ク御逗留有之。其頃長崎ノ頭人共博多ニ參上シ、御目見ヲ願フ由。然ルニ於彼地御老中ニ無礼ヲ成セシ故、如何ナル者ゾト御詮議有之處、彼者共ハ数年長崎ノ地ニ南蛮船ヲ相付ケ、切支丹ノ邪法ヲ信用シ、神社仏寺を破却シ、所ノ取捌ヲモ心儘ニ計フノ旨御聞ニ達シ、甚以不法至極也トテ、右の頭人共即刻彼追立伴天連共ハ早々可令帰国旨、長崎表ニ藤堂佐渡守ヲ被差遣御條目ヲ以急度被仰渡之。 (『長崎実録大成正編』)

タン武士の「頭人」らが処分あるいは海外へ追放された可能性がある。

「頭人・町年寄」についての記事については、HからMに分類できる(表3)。このなかでもっとも古いのは、『町年寄発端由緒書』のMであり、天正七年の長崎甚左衛門との合戦で甚左衛門が敗北して長崎を退散したため、高木・高島・後藤・町田が長崎の「地頭」になったという主張であり、安野氏が指摘しているように「町年寄」である家の者たちがその出身の正統性を示すために書かれた根拠に乏しい記事であると判断される。

次に、Hの天正十五年九月に藤堂佐渡守が長崎に差し下り、高木・高島・後藤・町田の四名が「地頭」になったという記事である。Iは、天正十六年に鍋嶋飛驒守に長崎が預けられ、毎年「頭人」の内1名が挨拶に上京することになったという記事である(『長崎集』では「天正十六年より町年寄が江戸え年以御礼勤る」というが「町年寄」でなく「頭人」の誤りであろう)。Jは、寺澤志摩守の代に、高木勲右衛門、高島良悦、後藤惣太郎、町田宗賀が町の「頭人」になったという記事である。Kは、文禄元年に寺澤志摩守が、4名の頭人を「町年寄」にしたという記事である。Lは、慶長末に江戸幕府公領になって奉行を定められ、高嶋・高木・後藤・町田の者共を「町年寄」と号し、その子孫が今に至り「町年寄」の職を相勤めることになったという『崎陽群談』の記事である。

H・I・Jは、町の住民によって代表となる「頭人」を選出していたのであるが、天正十五年から十六年にはかけてイエズス会との結びつきが深かった「頭人」らが一掃され、長崎の新たな支配者になった秀吉の家臣によって、高木・高島・後藤・町田の4名が「頭人」(「地頭」として選ばれたという、自治都市長崎から豊臣公領長崎への権力秩序の変化によって生じた歴史的画期が表された記事であろう。

ルイス・フロイスは、1591年(天正十九)8月19日に長崎に来航したポルトガルの定航船の黄金を、秀吉が買い占めるべく派遣された毛利壱岐守・鍋島加賀守が失敗して、その責任をとって役人が投獄されており、それから以後「乙名」という庶民の頭領に委ねることになったと書簡で報告している(松田監訳1987)。このフロイスが記している、役人に替えて庶民の頭領に委ねることになったという記事は、重要なことを示唆している。

それは、いままで町方の要職を武士出身者が占めていたが、町人出身の町方役人がでてきたということを表している。それはまた、文禄年間に商人身分の村山等安が長崎代官となったということと、村山の後、代官を継いだ博多商人出身の末次平蔵についても同様であり、豊臣政権によって戦国の世が統一された新しく形成された秩序の下で、公領地長崎において機構変革が行われ、町方指導層に変

化が生じたことを示している。

Kは、文禄元年（1592）に奉行となった寺澤志摩守によって、その時に「頭人」であった高木・高島・後藤・町田の4名が「町年寄」に定められたということである。文禄元年、秀吉が文禄の役で名護屋城に在陣していたときに、後藤宗印が参上している。新たに「町年寄職」に定められた4名の代表として、御札の挨拶に出向いたものであろう（山崎 2015）。このことは、のちの地役人組織としての基礎となる「町年寄」・「乙名」などの町方役人も併せて組織再編が行われた可能性をもっているの  
でなかろうか。

そしてLは、江戸幕府になった慶長末になって、高木・高島・後藤・町田の四家が「年寄職」としての「世襲」が定められた、という史実が表されているのではないだろうか。「世襲」の「町年寄職」が定められ、徳川公領下の長崎天領において、長崎地役人組織の体制が整備されていくことになるのであろう。

## おわりに

ここでは、長崎地誌・旧記類の「長崎町建て」に絞って関連記事を集成し、比較検討を行った。その成果の一つは、考古学の型式学的な視点から、史料の時系列的な系列を把握することで、長崎地誌・旧記類の系譜としての〈系統〉が明確になったことであろう。すなわち、①「長崎鑑」系、②「長崎拾芥」系、③「長崎港草」亜系、④「長崎略記A」系、⑤「長崎縁起」系、⑥「大村藩・大村家」系ほかの〈系統〉を把握することができ、①会所、②奉行所、③町人学者、④長崎頭人、⑤正覚寺僧浄遍（禿法・隠居蓮池院）、⑥大村藩などの関わりを想定した。

また、「長崎町建て」の歴史事象と「長崎頭人・町年寄」のあり方については、これまで長崎の歴史を研究されてきた多くの先学の業績に学びながら検討を行った。

しかし今回の論稿において、長崎地誌・旧記類の「長崎町建て」にかかる簡潔な内容の記事から読みとることができた歴史像は、まだ粗いデッサンにすぎないであろう。寛文の大火以前の史料が焼失した長崎のように文字記録による資料・情報が限られているケースでは、文献史研究だけでは歴史の実態や状況について多くを語り得ないことになる。長崎の「草創期の記述は必ずしも信用できない」とした箭内健次氏の言葉は、文献史による研究では手立てがないことを弁明した言葉にも聞こえてくる。そのような文献史研究における証明の方法がないという制約を乗り越えていくには、他領域から見た多角的な視点による研究アプローチが必要なのではないだろうか。

すなわち、「長崎惣町絵図」から江戸時代の長崎の町並を復元した布袋厚氏の仕事（布袋 2009）、古絵図をもって東京の町を歩き〈生きられた空間〉としての江戸における場所の記憶・文脈・意味を探り、都市江戸の空間的歴史的構造を読み解いた陣内秀信氏の仕事（陣内 1992）、あるいは歴史地理学などの研究方法などに学んでいかなければならないのだろう。

そして、もともと文字資料が存在しない時代を研究してきた考古学が力を発揮できることが考えられる。すなわち、発掘調査を行って地下に埋もれた都市の基層文化を掘り出し、調査成果から遺構の変遷を組み立て、町の形成等を検証していく考古学の方法である。長崎草創期の町の成り立ちを研究していくには、文献史の成果も検証しながら考古学の方法を活用した調査研究によって歴史像を復元していく「歴史考古学」の一分野である「近世考古学」によって調査研究することが望まれる。

そのような、領域を横断する多様な多角的視点でもって都市長崎の歴史を探究し、具体的で豊かな歴史像を描いていかなければならないのだろう。考古学の視点からみた、「長崎の成立と発展」についての課題については、別に稿を起す機会をもちたい。

表8 「長崎町建て」記事集成 (●は見出し、○は関連した文章、◎は引用文献として挙げられている文書)

1. 「大村藩・大村家」系史料

関係史料	長崎町建などの経緯
<p>「長崎割記」 延宝元年(1673)まで記載</p> <p>中西啓編『長崎割記・元成日記・元仲日記』1964 長崎在住の大村藩関係者(中西1964)</p>	<p>●長崎草創之事 【イ a】元亀元庚午年、長崎浦ニ始而南蛮船入津仕。翌二年三月、帰帆ノ時、長崎今ノ内町六町分、買申借地仕度旨、領主理専ニ訴訟仕候へモ、無ニ承引一。然ラハ重而長崎へ入津仕間敷由、カピタン申候テ、有馬修理太夫ヲ頼ミ、種々、理専コトハリ申候テ、南蛮人、内町六町分ヲ借ウケ、畠ニ青麦有之候ヲ刈捨、町ヲ立申候。町割ハ朝長対馬仕候ト也。 【イ a】天文十癸卯年八月、黒船、薩州種子嶋へ来ル。是、日本渡海ノ寂初也。其後、此嶋へ来リ、夫ヨリ豊後ニ入津、大友、切支丹紹宗ニナル。其後、肥前嶋原ノ内、口ノ津ニ来ル。夫ヨリ平戸ノ内、宅嶋ニ来。永禄五年より大村ノ内、横瀬浦ニ続ケテ入津。六年目ヨリ当領福田浦ニ三年入津。四年目、元亀元年庚午、長崎浦ニ初テ入津。同二年三月、帰帆ノ時、長崎内町六町分、借地、町立ル。其後、毎年長崎ニ入津仕候。</p>
<p>「大村記覚書：歴博本」巻二 歴博1396-13 宝永七年(1710)まで記載</p>	<p>●南蛮商船長崎浦入津する事并長崎町草創之事 【イ a】元亀二年庚子、南蛮人始テ長崎浦を巡見し、以後此所に入津して商賣せん事を於礼然共、純忠彼が以前当所に入津すといへども潰遂御里し事を思ひ、是を許容せずか。蛮人こうる修理太夫義貞純忠実兄を頼テ預りに願する故、純忠も止むるを江ずして許しか。同二年辛未三月始テ長崎村に町を建是を内町六町ト云、地子銀三百目納ム。以テ蕃国商賈の津と定是長崎草創なり。</p>
<p>「大村記覚書：大村家本」巻三 大村市歴史資料館 101-0135 幕末の大村純熙代まで記載</p> <p>村上直次郎『長崎市史 西洋諸国部貿易編』1938ほか</p>	<p>●長崎草創之事 【イ a】元亀元年庚午春、南蛮人商船ヲ長崎浦ニ遣シ、纒ヲウチテ航路ノ瀬方ヲサクリ、海ノ深サ浦ノ景氣ヲ見ルニ、瀬ナクシテ海深シ、是異国ヨリ通路ニ利アリテ、船繫マテ能地ナリト見テ、以往此所ニ入津シ商賣セン事ヲ純忠ニ請フ。然れども彼以前領内當所に入津すといへども、幾をなくして是を止む。今又是を許すと云ともとても始終、遂間敷とおもひ純忠曾テ許容せず固み、南蛮人重テ願へき根なく、有馬修理大夫義貞純忠実兄也、先年を南蛮船有馬領口の津へ入津の時よりをつる家へ通達し売る故、是を折となりを願べく託立す。義貞黙止かさずして純忠方へ使礼を以テ願の旨請を、詳に申越し拘。亦向後戻を申間敷と堅く証文を南蛮人へ仕らせべき事也。純忠止事をえずして応諾し、 【イ b】元亀二年辛未三月、純忠家士朝長対馬に令して長崎町割なすとし、嶋原町、大村町、文知町今外浦町の内ニ入、外浦町、平戸町、横瀬浦町今平戸町の内ニ入を地割りす。右六町を内町と云地子として毎年銀三百目納む、是所を蛮船商估の津と定むに、後南蛮船年々入津繁栄によりて、順々町数立添、慶長年中ニは内外の町数合して六十六町となれり。</p>
<p>「大村家秘録」 天明五年まで記載</p> <p>『史籍雜纂』第一 国書刊行会1974</p>	<p>●長崎異船代々公務覚 ○永禄五年、南蛮の商船始而領内横瀬浦に入津す、依レ之諸国の商人彼土に來而町を建つ、彼地五年入津して、其後領内福田浦に來津せり、元亀元年庚午春南蛮人小船を領内長崎浦に遣し、海底地理を考能地なりとして、以後此所に入津せんと請ふ、然れ共純忠深慮有テ許容せず、依之南蛮人有馬修理太夫義貞純忠の実兄也を頼む義貞使礼を以純忠に請ふ、純忠止事を得ずして応諾し、 【イ b】元亀二年純忠家士朝長対馬に命じて、嶋原町、大村町、文知町今外浦町ノ内ニ入、外浦町、平戸町、横瀬浦町今平戸町之内ニ入を地割りす。右六町を内町と云地子として毎歳二百貫目宛納む。此所を蛮船商估の津と定む。以後年々南蛮船入津繁昌によりて賑う町数立添、慶長年中には内外町数合して六十六町となれり。</p>

2. 「長崎鑑」系史料

<p>「長崎鑑」 歴博テ13126-1 歴博テ13126-2 延宝三年(1675) 橘景隆 正徳元年(1711)に 書写</p> <p>渡辺庫輔1961より</p>	<p>長崎鑑(内題) ●長崎建始之事 【ア】長崎領主長崎甚左衛門ト申仁ニ而御座候。彼甚左衛門儀太閤様背御意伐筑後江浪人仕候。其以後大村利仙と申仁賜地ニ罷成候由傳承候。 【イ b】然処に、元亀庚午歳長崎江初め黒船入江仕商賣仕候之、元亀貳辛未歳三月大村利仙家来友永対馬と申す者越見分上ヲ以地割仕候。町数嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文治町只今外浦町之内ニ入、横瀬浦町只今平戸町之内ニ入、右之分ハ初め町割仕候由。其以後年々に町屋敷出来申候由。 【ウ a】大村利仙領地之時、外浦町、大村町、嶋原町、平戸町、文治町、横瀬浦羅[浦]町、此六町出来仕申候。其後、本博多町、梶島町、今町、本五島町、内中[下]町出来申候。 【エ】其時分、高木勘左衛門、別当紹喜、後藤惣太郎、高木新七、高嶋一類、白倉如庵、吉岡一類、文知一類、馬場一類、須川・山本右之者共町之頭人ニ而御座候。 【表書】橘景隆翁而撰家記聚処之実録、此書始崎陽建始及万機最起而中諸明交易盛而終治所正君之嚴政述諸官者在無尤廣然也、上古建治於年至今歳凡貳百餘歳也。景隆述書之趣者一百卅六年也。予暇社司因景隆翁嫡士景寛得幸書写也。若博老得、此書泄一兩句亦將加愚筆統爾云。皆(とき)正徳改元卯龍中冬上冬五天、秀鳳園(女偏)重彦</p>
<p>「統長崎鑑」A(乙本) 歴博13147-2 延宝九年(1681)</p>	<p>統長崎鑑(内題) ●長崎町建并黒船入津之支 ○元亀元庚午年、長崎浦江黒船、始而入津仕、致商売候、此浦者、海深く入津之便路能、諸方之手遣宜敷、町屋を建申尔も、境地能、万端調、九国に無比類浦尔御座候故、日本、異国之商売以來、於此浦仕度奉存候間、町屋建申候所、借地仕度之旨、長崎領</p>

<p>朝長敬一郎ほか「續長崎鑑（其の一）」『長崎総合科学大学紀要』第29巻第2号1988 ほか</p>	<p>主大村民部大輔入道理専様江、黒船之者共御訴訟申上候得共、曾而御承引無御座候、依之石火矢、大筒、鉄炮其外種々之珍物等沢山進物仕、以来年々如此仕、其上地子銀差上可申之旨申候へ共、理專御納得無御座候付而、有馬領主有馬修理大夫様を頼ミ、様々御断申上候、修理大夫義貞公者、理專之御舎兄故、相済、一ヶ年ニ銀子三百目宛ニ而、内町六町分借地仕候、長崎甚左衛門知行所而御座候へ共、所替御座候而、 【イ a】元龜二辛未年三月、大村理專様家来朝永対馬与申者致奉行候而町割仕候、青麦を切拂、町屋を建申候、 【ウ a】其町数ハ大村町、嶋原町、外浦町、平戸町、文知町只今者外浦町之内ニ入申候、横瀬浦町只今者平戸町之内ニ入、右之六町始而建申候由、其後年々繁昌仕、本博多町、枕島町、今町、本五島町、内下町出来申候由、古老覚書付ニ茂申候、夫より上方諸国之商人集り、町数ニ罷成候、切支丹寺茂建申候、日本、異国之者夥鋪住宅仕候付而、長崎村、浦上村之者近郷故、諸事之便用両村より相達可申之旨、理專様より被伝候、 【E】其時分、長崎町之頭分之者ハ、高木勘左衛門、別当紹喜、後藤惣太郎、高木新七、高嶋一類、白倉如庵、吉岡一類、文知一類、馬場一類、深川〔須川〕・山本右之者共而御座候事。 【奥書】此統長崎鑑者、今度為巡見上使奥田八郎右衛門様、戸川幸之助様、柴田七左衛門様、就御初到着、自古来之義、御尋遊候ハ、差上之可申与存、考旧記、集古老数日詮義仕、長崎中寄合記之畢。 延宝九辛酉年六月日</p>
<p>「統長崎鑑」B（甲本） 歴博13147-1 天和三年（1683）まで記載 朝長敬一郎ほか「續長崎鑑（其の一）」『長崎総合科学大学紀要』第29巻第2号1988 ほか</p>	<p>●長崎建始之事 【ア】長崎領主長崎甚左衛門ト申仁ニ而御座候。彼甚左衛門儀太閤様背御意伐筑後江牟人仕候。其以後大村利仙と申仁之領地ニ罷成候由傳承候。 【イ b】然処ニ、元龜元庚午年長崎江初而黒船後入津仕商賣仕候、依之元龜二辛未年三月、大村利仙家来友永対馬と申者見分之上を以地割仕候。町数嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町唯今は外浦町之内ニ入申候、横瀬浦町唯今ハ平戸町之内ニ入申候、右六町之分初而町割仕候由、其以後年々町屋敷出来仕候。 【ウ a】大村利仙領地之時、外浦町、大村町、嶋原町、平戸町、横瀬浦町、此六町出来申候。其後、本博多町、樺島町、今町、本五島町、内下町出来申候。 【E】其時分、高木勘左衛門、別当紹喜、後藤惣太郎、高木新七、高嶋一類、白倉女房〔如庵〕、吉岡一類、文知一類、馬場一類、深川・山本右之者共、町々領分ニ而御座候。</p>
<p>「長崎記」：西勝寺蔵 歴博13101-2 元禄五年（1692）まで記載</p>	<p>●長崎建始し事 【ア】長崎領主長崎甚左衛門申仁ニ而御座候。彼甚左衛門儀太閤様背御意伐筑後牟人仕候。 【イ b】其以後大村利仙と申仁領地ニ罷成候由傳承申候。然処ニ元龜庚午（元）年長崎え初而黒舟入津仕商賣仕候儀之。元龜二辛未年三月、大村利仙家来友永対馬と申者見分之上を以地割仕候。町数嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町唯今は外浦町之内入、横瀬浦町唯今ハ平戸町之内ニ入、右六町之分初而町割仕候由、其以後年々に屋敷出来候由。 ○黒舟長崎え入津無之以前領主長崎甚左衛門居所ハ長崎村春徳寺上之山を城構ニ致、住宅は右之村庄屋居申候ニ而御座候。彼甚左衛門儀、大村領主前之丹後守姉賀之由承候。其時分深堀茂宅と申者深堀領主ニ而御座候。然処ニ長崎とは敵々ニ候故、深堀より人数五百斗催長崎江切々押寄りを申ニ付、長崎よりも人数式三百程ニ而長崎境迄出向ふせき申候。右之通数度取合申候得共、終りに長崎之方打負不申候。尤双方少宛討死仕候由申傳候。 【ウ a】甚左衛門牟人之後、大村利仙領知之時、外浦町、大村町、嶋原町、平戸町、文知町、横瀬浦町比六丁出来申候。其後、本博多町、枕島町、今町、本五島町、内下町出来申候。 【E】其時分、高木勘左衛門、別当紹喜、後藤惣太郎、高木新七、高嶋一類、白倉如庵、吉岡一類、文知一類、馬場一類、須川・山本右之者とも町之頭分ニ而御座候。</p>
<p>「長崎虫眼鏡」 元禄十六年（1703） 弄古軒菅秋（長崎に訪れた他国の人） 江原氏が崎陽に伝聞せしを記した 木版図書 丹羽漢吉校訂『長崎虫眼鏡・長崎見聞録・長崎縁起略』長崎文献叢書第一集第五巻 長崎文献社1974</p>	<p>●長崎興建 【ア】しかるに甚さえもん不慮の事ありて、太閤秀吉公の御意をそむき、筑後へ浪人す。そのうち大むら利仙領となる、 【ウ a】元龜元年かのへ午のとし、長さきへ黒ふねはじめて入津商ばいす、これによつてあくる未とし三月、利仙家来友永対馬、見分のうへ地わりをし、そとら町、大むら町、嶋ばら町、ひら戸町、ぶんち町、よこせうら町、以上六町はじめて出来たり、そのうち又本はかた町、かはしま町、今町、元五島町、内下町いできしと也。 【E】その比高木かんざえもん〔高木勘左衛門〕、別当紹喜〔沼喜田小庵か〕、後藤宗太郎、白倉如庵、たかしま〔高島〕一類、よしおか〔吉岡〕一類、文知〔平戸屋文知坊か〕、ふか川〔須川主水か〕ば、〔馬場〕、山本等、まちまちかしらぶん〔町々頭分〕として諸事を支配す。</p>
<p>「長崎鏡」 正徳四年（1714）に書写追加した さらに弘化二年（1854）長崎在勤中写之長崎奉行所に在勤した者が書写したもの 柴秀夫編『長崎遺響』双林社1943</p>	<p>●長崎建始之事 【ア】長崎領主長崎甚左衛門ト申仁ニ而御座候。彼甚左衛門儀太閤様背御意伐筑後江牟人仕候。其以後大村利仙と申仁之領地ニ罷成候由傳承候。 【イ b】然る処、正徳四年迄百四十四年長崎江初而黒船入津仕、商賣仕候。依之元龜二辛未年三月、大村利仙家来友永対馬與申者見分之上を以而地割仕候。町数嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町、横瀬浦町、右六町之分初而町割仕候由。其以後年々ニ町屋敷出来申候由。 【ウ a】大村利仙領知之時、外浦町、大村町、嶋原町、平戸町、文知町、横瀬浦町、此六町出来申候。其後本博多町、枕島町、五嶋町、内〔下〕町出来申候。 【E】其時分、高木勘左衛門、別當紹喜、五嶋惣太郎、高木新七、高嶋一類、白倉怒屬〔如庵〕、吉岡一類、文知一類、馬場一類、深川〔須川〕・山本右之者共町之領分</p>

	に御座候。
<p>「長崎建立并諸記挙要」 嘉永七年（安政元・1854） 青木永繁（諏訪神社宮司） 私的な目的で書き溜めた覚え書（武野要子） 『日本都市生活史料集成』6 港町編Ⅰ 学習研究社 1975</p>	<p>●長崎建始之事 【ア】長崎領主長崎甚左衛門儀、太閤様之背御意筑後へ牟人仕候、其己後大村利仙給地に罷成候由、 【イb】然処元龜元庚午年長崎江初而黒船入津、依之元龜二辛三月十八日大村利仙家来友永対馬見分之上を以地割仕候、町数島原町、大村町、外浦町、平戸町、文治町、横瀬浦町右六町分初而町割仕候、其以、後年々町屋敷出来、但文治町只今は外浦町之内に入、横瀬浦町は只今之平戸町之内に入候。 【ウa】大村利仙領地之時外浦町・島原町等之六町出来申候、其後、本博多町、梶島町、今町、本五島町、内中町〔内下町〕出来申候、 【E】其時分高木勘左衛門、別当飯喜、後藤惣太郎、高木新七、高島一類、白倉如庵、吉岡一類、文治一類、馬場一類、深川〔須川〕山本右之者共町之頭分に而、 ●天正十五年（1587）ノ年表のなかから 【H】九月藤堂佐渡守下向、高木・高島・後藤・町田四人地頭と成、太平寺盧山和尚の長崎記に出る。</p>
<p>「長崎日記」 「長崎古今集覽」 文化八年（1811） より引用</p>	<p>【イb】其以後永禄十年、義榮公八月廿三日、黒船始テ来リ交易セシヨリ、尤交易ノ儀ハ大将利仙ノ支配ト云リ、元龜二年、大村利仙方ヨリ友永対馬ト云者ヲツカワシ森崎ヨリノ堀迄テ六丁町ノ町ヲ立初シ也。 ○爰ニ其比、当所ノ頭分ノ輩何某等、皆南蛮ノ方ヨリ邪宗ト成リ、終ニ吉利支丹ノ寺ヲ立テ、大村利仙ニ申遣シケレハ、長崎ノ諸事支配ノ儀ハ、皆南蛮ノ方ヨリ支配可レ致ト、時ニ利仙、嘗テ承引ナキヲ以テ、故ニ然ラバ於ニ当地一黒船交易致ス事有バカラズト、其比高来郡領主仙朝（カンサ）修理ト云者有リ、是吉利支丹ノ伴天連ナルニ、則此人来リ、当所ノ大村扱ヲ入テ、終ニ当所ハ江戸町中邑里共ニ吉利支丹ノ知行トシテ諸事寺ヨリ支配セント也。 【ア】深江浦ハ旧名也、長崎ハ昔長崎小太郎名字ニ依テ云リ、又云、長崎町ノ初ハ元龜二年未三月ヨリ六丁。又云、元龜二年迄ハ甚左衛門領地也、元龜二年ヨリ大村領となる文禄元辰年ヨリ太閤様公領トナル、… 【E】甚左衛門牟人以後、長崎頭分町人高木勘左衛門、別当沼喜田、後藤惣太郎、高木新七、高島茂四郎、白倉如庵、吉岡・文知・馬場・須川・山本、元龜二年ヨリ文禄元年迄二十一年、此人々長崎領分大村ト相談ノ上、黒船商売ス。 【Aa】元龜二年ヨリ文禄元年迄二十一年、此人々長崎領分大村ト相談ノ上、黒船ト商売ス、又云、元龜二年春者即三月也、大村ヨリ利仙名代トシテ友永対馬ト云者来リ、島原ヨリハ則城主有馬修理太夫越レタリ、爰ニ当地ノ者共立合テ町割アリ、茂木日見峠モ此時開也。 ○則公領トナサレ、唐津城主寺沢氏ニ御預ケト云ヘリ、寺沢広高預リメサレ、二ノ堀ノ間御屋敷在テ、折々御越シナサレ、又ハ御在国ノ間ハ御代官ヲ召置御仕置ト云リ、此節博多ノ異国商売人共来リ集リ、二ノ堀ノ間住宅其所ヲ博多町ト云リ。</p>

### 3. 「長崎拾芥」系史料

<p>「庫物長崎記」 歴博へ1339 延宝七年（1679） 安政四年（1857）に 書写 渡辺庫輔1961より</p>	<p>●内町建始町年寄始并堀出来し事 【エ】翌年元龜元庚午年黒船老艘此湊へ初而乗入、糸巻物数千貫目ノ貨物持来リ、江戸町ノ沖へ掛ケ置候得共船にて商売難成此森崎ニ假屋を立て商売するにより、近国在々所嶋原・大村・横瀬浦其外京大坂堺ノ商人共此所ニ集リ銘々假屋ヲ立テ申ニ付、其節大村之友永対馬与申者元龜貳年町割シ、夫付、島原町、大村町、平戸町、梶島町此分立初る。 【J】其比、奉行寺沢志摩守代ニ、惣町割江郷付時ニ、高木勘右衛門・高嶋良悦・後藤惣太郎・町田宗賀ト云者、宿老ニ而町ノ頭人となる。夫則今年寄ノ先祖是也。 【奥書】此長崎明鑑者、延宝七巳未年書中肝要之事跡并曆算吟味致拔萃呈書ニ相成候。其草稿ニ可有之候。当安政四丁巳年迄百七拾九年を経、以今既ニ亡滅可致之處、幸ニ表装を加江、被免之用ニ相達候。今哉諸蛮之異船来津ノ砌ニ付、此書を以古今ノ不同可推計見察如此而已。</p>
<p>「長崎拾芥」 元禄二年（1689）ま で記載 長崎奉行関係の人 （解題：越中哲也） 『長崎拾芥・華蛮要 言』純心女子短期 大学長崎地方文化史 研究所 1987</p>	<p>●長崎建始并南蛮船初て長崎江来る事 ○南蛮人乗来る黒塗りの大船日本にてハ黒船と名付、此船天文の比は大隅の内種子嶋或いは豊後に着し、其後大村之内福田横瀬などと云所に渡海す、此時大村領主大村民部少輔純忠比由を開き福田の地頭福田左京と云ものにいひ遣しけるハ、彼黒船には鉄炮石火矢を積来る間諸方ノ津に着せは定て所々の領主鉄炮石火矢を望へし、然ハ今諸国合戦之最中なれハみな望むへし幸此津に着すれば自今他の津に至らざる様に其心得有へしと云ひ遣しける、因茲左京も是を馳走し民部も是を登す、夫より年々着津せしか此処風波甚し日々永く船ヲつなき難し、何れの湊成とも風波之凌屋すき処をと求むれ共、更に心にかなふ湊なし、然に彼蛮種共初て此津の景地見るに蒼海広て底ふかく三方ハ高山在れハ難風の愁なし、如斯の景地三国広しといへともいつれの津か此地に増らむとて、 【オ】永禄十二年に初て戸町浦に一艘着岸し、其後元龜元年に此長崎に乘入れ夫より諸国の商人きそい來り商賣せしにより所もおのつから賑ひたるゆへ此所賣買の地に取立なは弥増に繁榮すへきとて、元龜二年に大村理専家頼に友永対馬と云者を遣し見分にて町割を致す、依之諸方の者同国に一所にあつまり一町を取、小屋を掛己の生所の土地の名をとり町の名にさたむ、 【D】此時、高木勘左衛門、高嶋了悦、後藤惣太郎、町田宗賀四人は町の頭人にて拾八年の間御公領に成まで町中致支配、其後次第に町数多く成榮、近国ハ不及申、江戸・堺・大坂・津々浦々の者迄も不來と云事なし繁昌の津とは成たり。 【カ】長崎地年々に異国船の着津に取立ぬと思ひ元龜貳年大村利仙家頼友永対馬と云者を遣し町割を定むる所に、諸方より集りし商人或ハ浪人等望に隨ひ是を渡す、尤</p>

	<p>も国々の者共一所に集り一町を取、大村より来る者は一町に住して大村町と名付、嶋原・杵島・外浦の者居住して銘々其生所取て名之、如此貳拾町余取立。  <b>【K】</b> 拾九歳後、天正十六年公領と成りて四年か間鍋島飛騨守預り、文禄元年に奉行として寺沢志摩守を指下さる。其比町の頭人四人在り、志摩守赦之町年寄と名付、此時町数貳拾三町に極る。</p>
<p>「長崎始由来記」      歴博13671      慶長十五年の有馬晴信の長崎沖での南蛮船焼討事まで記載</p>	<p>長崎始由来記 (内題)  <b>●長崎町建始め并南蛮船初て長崎へ来る事</b>      ○それより年々福田ニ来津せしが、此所風波はげ敷永く船をつなぎ難し、いづれの港からとも風波の凌安き處を求むれ共、更に心に叶ふ港なし、然ルニ彼蛮夷種共はじめて此津の様子を見るに、蒼海廣く底深く三方を高山あり風波の恐れなし。斯此如き景地三国廣としていふとも、いづれの津の此地ニ増らんとて、  <b>【オ】</b> 永禄十二年二初て戸町浦へ老艘来着し、其後元龜二年ニ此の長崎ニ来舟入、夫より諸国の商人つどい來り商賣せしニより所も、おのつからにぎわいある見、此所商賣の地ト取立てなは、弥増と繁榮すべしとて、元龜二年に大村理專家来友永対馬に立始めを出し見分して町割をいたすに、是ニよろしく諸方の者同国の者ハ一所ニ集まり、老町を宛、小家をかけ、己の生所の土地の名を町名ニ定む。  <b>【D】</b> 此時、高木勘左衛門、高島了悦、後藤惣太郎、町田宗賀四人ハ頭人にて拾八年ノ間御公領ト成り町中の支配いたし、其後次第ニ町数多く成り、近国ハ不及申、江戸・堺・大坂津々浦々の者として来不港と云事なし繁昌の津とハなりニけり。  <b>【カ】</b> 長崎地を異国船の来津ニ取立んと思ひ、元龜二年大村理專家来友永対馬といふ者を遣わし、町割を定め、諸方より集りし商人或は浪人等望ニ随ひいえを割あて、国々の者ども一所ニ集り老町を宛、大村より来る者ハ老町ニ領して大村町と名付、嶋原より来る者ともハ嶋原町と名付、外浦より来る者ともハ外浦町と名付稱して各生所を取て町の名として、如貳拾余取立。  <b>【K】</b> 十九年の後天正十六年公領と成りて四ヶ年の間鍋嶋飛騨守預り、文禄元年ニ奉行様として寺沢志摩守を指下さる。其比頭人四人あり、志摩守之を町年寄と名付、此時町数貳拾三町ニ極る。</p>
<p>「長崎根元記」      元禄九年 (1696) 頃まで記載      新村出監修『海表叢書』巻四 更生閣 1928</p>	<p><b>●長崎小太郎末業並居所之事</b>  <b>【ア】</b> 然るに文禄の比太閤秀吉公名護屋御在陣の節、名護屋に不出頭故、領地を被召取其家亡、甚左衛門は大村に退居す。  <b>●長崎町開基並長崎に來事</b>  <b>【エ】</b> 南蛮船天文の比より永禄十二年までは、大隅の内種子島、豊後又は福田、横瀬浦など云所に着岸して、其所々にて商賣をなす。然共蛮夷心に應ずる湊なし、然處に長崎の湊海底深く三方山高して、難風凌能第一の湊なりと見立、元龜元年に始て長崎に着岸す。因茲上方並諸国の商人假屋を建商賣す、  <b>【キ】</b> 其比、今の内町は大村の領主大村民部入道理専領知也。就夫理專家来友長対馬と云う者を指越、蕃夷ども末々までも、此地へ着岸せしむるに於ては取立べき由にて、則元龜二年に町割りをなし、國々より集まる所の名によせて、其集まる所の者ハ一所に置、或は豊後町・大村町、或は平戸町、或は五島町などノ名付け、町之頭人を定、今の町年寄先祖左の如し。  <b>【C】</b> 町之頭人      高木勘右衛門 法体して了賀【可】と云、今の作右衛門祖也      高島了悦 今の四郎兵衛祖也      町田宗賀 亡 此跡役高木彦右衛門、法体して道盛と云、今の彦右門祖也      後藤惣太郎 今の庄左衛門祖也</p>
<p>「崎陽雜記」(櫛記)      歴博131223      「長崎奉行次第」に元禄九年 (1696) 頃までの記載      内閣文庫を県図書館複写      表書きに「長崎志」、「長崎古今集覽」が記されているのころから、文化11年以降に書写されたものであろう</p>	<p><b>●長崎町開基并南蛮船初て長崎ニ來る事</b>  <b>【エ】</b> 南蛮船天文之比より永禄【禄】十二年までハ、大隅の内種子島、豊後またハ大村之内ニ福田・横瀬を【浦】といふ所ニ着船して其所々にて商賣す、然處に蛮夷屋に應ずる湊なし、然處長崎之湊、海ふかく三方高山有て難風凌く湊也と見立、元龜元【年】初て長崎に着船す、依之上方【浦諸国の商人假屋を建商賣す。  <b>【キ】</b> 其比、いまの内町ハ大村領主民部入道理専領地也。就夫理專家来之友永対馬といふものを差越、蛮夷共末々までも此地ニ着岸におゐてハ町を可取立由約束いたして、則元龜二【年】ニ町わりをなして、國々所々より集り候もの共、同国を一所ニ置、其国の名を付、或ハ豊後町・大村町・平戸町・五嶋町杯と名付、町之頭人を宅【定】て今の町年寄之先祖是也。  <b>【C】</b> 町之頭人      高木勘右衛門 刺髪して了賀といふ、今の作右衛門祖也      高木【嶋】了悦 今の四郎兵衛 祖也      町田宗賀 亡 此跡高木彦衛門刺髪して道感と云 今の彦右衛門祖也      後藤宗太郎 今の庄右衛門祖也</p>
<p>「長崎記原」      標題の「長崎始原」が訂正されている歴博131221      「長崎奉行ノ次第」に、宝永八年 (1711) 頃まで記載がある      内閣文庫を県図書館複写</p>	<p>長崎記 (内題)  <b>●長崎町開基并南蛮船初長崎ニ來事</b>  <b>【エ】</b> 南蛮船天文ノ比ヨリ永禄十二年マテハ、大隅ノ内種子嶋、豊後、又ハ福田横瀬浦ナトノイフ所ニ着船シテ、其所々ニテ商賣シスカレトモ、蛮夷コノロニ應スル湊ナシ。然ルトコロニ長崎ノ湊海底深く三方山高有テ難風凌ヨク第一ノ湊ナリトテ見立、元龜元年ニ初テ長崎江着船ス。因茲上方諸國ノ商人假屋ヲ立商賣ス。  <b>【キ】</b> 其比今ノ内町ハ大村ノ領主大村民部入道理専領知ナリ。就夫理專家来友永対馬ト云者ヲ差越、蛮夷共末々マテモ此地江於着岸ハ町ヲ可取立ヨシ約束イタシ、則元龜二年ニ町割ヲナシ、國々所々ヨリ集候モノ同國一所ニ置、其國ノ名ヲツケ、豊後町、大村町、平戸町、五嶋町ナトノ名ツケ、町ノ頭人定。今ノ町年寄ノ先祖是也。  <b>【C】</b> 町之頭人      高木勘右衛門 法鉢シテ了賀ト云。今ノ作右衛門祖也      高島了悦 今ノ四郎兵衛祖也</p>

	町田宗賀 亡 此跡役、高木彦右衛門法躰シテ道感ト云、今ノ彦右衛門祖也 後藤惣太郎 今ノ庄左衛門祖也
<p>「長崎旧記」</p> <p>「長崎奉行之次第」に享保十二年(1727)9)頃までの記載がある 長崎奉行所関係の者(太田勝也)</p> <p>太田勝也編『近世長崎・対外関係史料』思文閣出版 2007</p>	<p>●長崎小太郎末葉并居所之事 【ア】文録〔禄〕之比秀吉公名護屋御出陣之節彼地ニ不出頭故領地を被召取家亡甚左衛門大村に退去、 ●長崎開基并南蛮船初而長崎ニ来事 【エ】南蛮船天文之頃より永録〔禄〕十二年迄者、大隅之内種子嶋・豊後又ハ大村之内福田・横瀬浦など云所ニ着船シテ其所々ニ而商売す、然共蛮夷心ニ応ル湊なし、然所長崎之湊海底深ク三方高山ありて難風凌よく第一の湊なりと見立、元龜元年始而長崎ニ着船す、依之上方諸国の商人仮屋を建商売す、 【キ】其比今の内町ハ大村領主大村民部入道理専領地也、就夫理專家来の友永対馬と云者ヲ差越、蛮夷トモ末々迄も此地ニ於も此地ニ於着岸者、町を可取立由致約束、則元龜二年ニ町割を成して、国々所々より集り候者共、同国ヲ一所ニ置、其国々ノ名を付、或ハ豊後町、大村町、平戸・五嶋町などト名付町ノ頭人ヲ定ル、今の年寄之先祖是也。 【C】町之頭人 高木勘右衛門 剃髪シテ了賀〔可〕と云今之作左衛門祖也 高嶋了悦 今の四郎兵衛祖也 町田宗賀亡 此跡高木彦右衛門利髮道感と云今彦右衛門祖也 後藤宗太郎 今ノ庄左衛門祖也</p>
<p>「長崎集」 宝暦四年(1754)頃 田辺茂啓か(解題：越中哲也)</p> <p>『長崎集』純心女子短期大学長崎地方文化史研究所 1993</p>	<p>●長崎開基之事 【ア】然る処に文禄の頃、秀吉公筑前箱崎御出陣の節、不出頭故領地被召取家亡、甚左衛門は大村之椽に退去す。又始は筑後の縁に退、其後大村に縁有を以彼方へ参候由子孫今大村にあり、 ●南蛮船初めて長崎へ来る事 并町立始之事 【エ】南蛮船天文の比れより永禄十二年大隅之内種子島、豊後又ハ大村領内福田・横瀬浦等と云所に着岸し其所にて商賣す。然共蛮戒心に應ずる湊無し、長崎の湊は海深く三方に山有て難風凌能第一の湊と見立、元龜元年初て長崎へ着岸す、依之上方諸国の商人假屋を建商賣す、 【キ】其比、今の内町は大村領主大村民部入道理専領地也。就夫理專家来友永対馬と云者を差越、蛮戒末々迄も此地へ着岸しおみては町を可取立由致約束、則同二年に町割を致し、国々所々より集候者同国を一所に置、其の国の名を付、或いは豊後町、大村町、平戸町、五嶋町等と名付、町の頭人を定、今の年寄の先祖是也 【イb】元龜二年辛未大村理專家来友永対馬と申者見分の上、町割仕候。嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町後外浦町ニ加ル、横瀬浦町後平戸町ニ加ル。右六町之分初て町割仕候由、其以後年々家出来申候。 【F】●長崎町立始よりの役人 生国筑前牢人 末次興善 長崎代官職 同 平蔵 生国芸州牢人 村山東庵 後長崎代官勤る前の名安東と有り 近国歴々の御牢人の由 高木作右衛門 同所 高嶋了悦 高嶋殿の祖 同所 後藤惣太郎 後藤惣左衛門殿祖 高木勘左衛門 作右衛門祖 高木清右衛門 町田宗賀 高木彦右衛門殿祖 白倉如庵、吉岡一類、馬場一類、深川・山本之何某 右之外 右之通古書に有 【I】天正十六子年より町年寄始て江戸え年以御礼勤る。※年号等に混乱がある</p>
<p>「長崎実記」(實記) 歴博134291 宝暦十年(1760)まで記載 県図書館史料(原稿用紙に書写)</p>	<p>●南蛮船初長崎に来る事 【エ】南蛮船天文之比より永禄十二年大隅之内種子嶋、豊後亦は大村領福田・横瀬浦と云所に着船、其所々にて商賣す、然共蛮人心に應ずる湊無之長崎の湊は海深三方に山有て風難を凌ぎ能第一の湊と見立、元龜二年初而此地に着船す、於是近国之商人假屋を建商賣を始、此地過半大村民部入道理専領地なり、 【カ】同二年大村理専友永対馬と云者見分之上町割を致し、国々より集しもの同国を一所に置、其国々の名を付、島原町、大村町、外浦町、文知町後五嶋町へ加る、横瀬浦町後平戸町に加る。</p>
<p>「長崎実録大成正編」 (「長崎志正編」) 宝暦十年(1760)序明和元年(1764)に奉行所に上納し、明和四年(1767)まで記載 田辺茂啓</p> <p>丹羽漢吉・森永種夫校訂『長崎実録大成正編』長崎文献叢書第一集第二巻 長崎文献社 1973</p>	<p>●長崎開基之事 ○且又文禄元年島原町ニ一ノ堀、豊後町ニ二ノ堀、勝山町ニ三ノ堀ヲ修築ス。是ヲ三ノ尾ノ要害ト云云。 【ウb】元龜元年、長崎湊ニ南蛮船始テ着岸シ商賣ヲ遂ケ、向後長崎ヲ渡リノ津ニ定タキ旨、領主大村理専ニ願フ故、翌年三月家来友永対馬ヲ長崎ニ遣シ、地割ヲ初メ、島原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町、横瀬浦町、六町建之。其後博多町、樺島町、今町、五嶋町、内下町出来シ、二十餘年ヲ経テ文禄ノ初二至リ、二十三町出来ス。 【G】町々の頭人ニハ、高木勘右衛門、後藤惣太郎、高島四郎兵衛、高木新七、町田宗賀、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門等也。此内高木・高島・後藤・町田四人町年寄ト成ル。 【ク】旧説ニ元龜二年町割有シ時、島原町ハ有馬修理大夫建之、大村町ハ大村理専建之由見ヘタリ。評ニ曰其頃ハ大村家ノ領地ナルニ、有馬家ヨリ島原町ヲ建、大村家ヨリ大村町一町ヲ建、其外諸處ノ者此地ニ来テ心ノ儘ニ町造リスヘキ理有之哉。是年々出来セシ町筋ノ内ニ、同郷親族ノ者近隣ニ集リ住テ、或ハ島原ノ者或ハ大村ノ者住居セシ町筋ヲ、自然ト其町名ニ呼習セシ由也 ●惣町割地ノ事</p>

	<p>【ウb】元龜二辛未年地割始り、六町出来シ、年々地形ヲ開キ、町屋敷ヲ建広メ、文祿ノ頃迄二拾三町出来ス。但天正十六年長崎御料所ニ被仰付、地子御免除之地ト成ル。是ヲ内町ト称ス。</p>
<p>「長崎実録大成補遺」 小原克紹・巴山 (1693-1777) (儒者・画家、長崎聖堂書記役) 「長崎志統編」編集に携わる 『長崎の空』第22集 長崎歴史文化協会 2011</p>	<p>○長崎ノ湊ヲ見ルニ、海広クシテ底深ク、山嶽邈邈トシテ風波ノ憂無ク、何レノ津力ニ優ントテ、永祿十二年、当湊内大村領分戸町浦ニ来リ、翌元龜元年、当津ニ来リシカバ、諸国ノ商人競ヒ集テ賑フニ依テ、当所ヲ交易ノ場所ニ取立ナハ繁榮ノ地成ルヘシトテ、 【カ】翌年(元龜二年)大村理専方ヨリ家臣友永對馬ヲ遣ハシ当所ノ内大村領分ノ地ニ、三月十五日町割シケレハ、人々同国ハ同国同土、一所ニ集テ一町宛ヲ請ケ、家ヲ建連テ各生所ノ地名ヲ以テ町ノ名トシ、嶋原町・大村町・平戸町・外浦町・横瀬浦町・文知町、以上六町相揃ヘリ。 【G】往年ヨリ、高木新七郎、佐々木茂四郎、町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵、代リ合テ当所ノ当人タリシカ、元龜ノ頃ハ高木勘左衛門、高島了悦、後藤惣太郎、町田宗賀、此四人当人トシテ町方支配セリ。 【エ】諸説ニ、南蛮船ハ元龜元年、初テ当津ニ来ルト雖モ、……理専ハ宗麟幕下ノ事ナレハ、大村ニ云ヒ越シテ南蛮船ヲ廻シ、ニ、大村湊口、針尾ノ瀬戸狭クシテ大船乗入レ難ク、幸当所ノ内ニ同領有ルニ依テ、当湊ニ廻シタリ。八月廿三日神崎ニ繫リ、翌日入津セリ。是ヨリ諸国ノ商人来集テ民家ニ居余リ、仮屋ヲ建テ賑フニ依テ、 【Ab】翌年(元龜二年)三月、有馬修理大夫来リ、大村利専代トシテ友永對馬来リ、四人ノ当人立合テ地割シ、六丁町ヲ建初メリ。 ※4人は高木・高島・後藤・町田 【K】文祿元年、寺澤志摩守長崎奉行仰付ラル。尤、其頃御出陣ノ間ハ御供ナル故、家臣岡崎権平・谷山源蔵、兩人ヲ当所に遣ハシテ諸事執行ハシメ、唐津拜領有テヨリ、本博多町ニ屋捕ヲ構ヘ、家臣佐野惣左衛門ヲ遣ハシテ代官セシメ、自身モ時々来テ事ヲ執行ハル。当所、此時ノ当人モ高木勘左衛門、高嶋了悦、寺[町]田宗賀、後藤惣太郎、此四人町方掛リナルヲ、志摩守是ヲ改テ、町年寄ト名ツケラレタリ。</p>
<p>「長崎記」：テ13127 歴博テ13127 寛政二年(1790)頃まで記載 この本を福田忠昭が県図書館原稿用紙に書き写したものが歴博13430</p>	<p>●長崎開基并南蛮船初而長崎に来る事 【エ】南蛮船天文之頃より永祿十二年迄は、大隅之内種子ノ島・豊後又者大村之内福田・横瀬浦杯[杯]云所に着船して其所々にて商売す、然處蛮夷心之應ふる湊なし、然處長崎之湊海底深く三方に高山有而難風凌能第一之湊なりと見立、元龜元年の初而長崎に着船す、因茲上方諸国ノ商人仮屋を建商賣す、 【キ】其比、今之内町ハ大村領主大村民部入道理専地也、就夫理専家来之友永對馬ト云者を差越、蛮夷共未々迄も此地江於着岸は町を可取立由致約束、則元龜二年に町割を成し、国々所々より集候者、同国を一所に置、之国々ノ名を付、或は豊後町・大村町・平戸町・五島町杯[杯]と名付、町之頭人を定る、今の町年寄之先祖是之、 【C】町之頭人 高木勘左衛門 剃髪して了賀[可]と云、今之作左衛門祖也 高嶋了悦 今の四郎兵衛祖之 町田宗賀 此跡没高木彦右衛門剃髪し道感と云今彦右衛門祖也 後藤宗太郎 今ノ庄左衛門祖也</p>
<p>「長崎記」：中川忠英 寛政七年(1795) 中川忠英 太田勝也編『近世長崎・対外関係史料』思文閣出版 2007</p>	<p>●長崎始之事 【イb】其時代元龜元年午年長崎へ南蛮船ト云黒船始テ入津貨物商売仕候、依之同二年未三月理専家来友永對馬ト申者見分ノ上ニテ長崎地割仕候由、嶋原町・大村町・外浦町・平戸町・文治町・横瀬浦町、此六町始テ割出来年々内町十六町取立候由但、文治町・外浦町・横瀬浦町ハ平戸町ノ内ニ入今ハ其名ナシ。 【D】如斯町屋出来、天正十五丁亥年迄十八年ハ、高木勘左エ門、高島了悦、後藤惣太郎、町田宗賀、此四人ノ支配仕候。</p>
<p>「華蛮交易明細記」寛政七年(1795)から享保元年(1801)頃 業商で名前不明(解題：武野要子) 『長崎県史』史料篇第四 吉川弘文館 1965</p>	<p>●長崎由来之事 【ア】文祿[祿]ノ頃太閤秀吉公筑前箱崎筑前箱崎御出陣[陣]ノ節不出頭故、領地召取家亡ス、甚左衛門ハ大村ニ退去ス、又ハ筑後ノ後ニ退、又其後大村ニ縁有を以彼方江参候由、子孫今ニ大村ニ在。 ●南蛮船初テ長崎ニ来ル事 【エ】南蛮船天文ノ頃より永祿[祿]十二年迄(寛政六寅年迄貳百貳拾六年ニ成)、大隅ノ内種子嶋、豊後、大村領ノ内福田・横瀬浦杯と云所ニ着船シ、其所々ニ而商賣ス。然共蛮戎(朱)共心ニ応ル湊無之、長崎ハ海深く三方ニ山在リテ難風凌キ第一ノ湊ト見立、元龜元年(寛政七年卯年迄貳百貳拾五年ニ成)、初テ長崎江着船ス、依之上方諸国ノ商人仮屋建商賣す。 【キ】其頃今ノ内町者大村ノ領主大村民部入道理専也、夫ニ付理専家来ノ内ニ友永對馬ト云者ヲ差越、蛮戎未々迄モ此地江着岸ヲ致、国々所々より集り候同国ノ者ヲ一所ニ置、其国所々ノ名ヲ付ケ、或ハ豊後町、大村町、嶋原町、平戸町、五嶋町杯と名付ケ、町々頭人ヲ定ム、今ノ町年寄ノ先祖是也。 【ウa】元龜二辛未年大村理専家来友永對馬見分之上町割致ス、寛政七卯年迄貳百貳拾四年ニ成、嶋原町・大村町・外浦町・平戸町・文知町後外浦町替ル、横瀬浦町後平戸町替ル、右六町ノ分初テ町割致ス、其後歳々町家出来ル也。 【F】●長崎町建始より役頭 生国筑前 浪人 末次興善 「延宝年中改易ニ成ル、」 代官職 同 平蔵 生国安芸ノ 浪人 村山東安 「発端ハ長崎住居、夫より加藤へ仕官ニテ罷越、又長崎へ立戻リトモ云リ」 肥後領主加藤主計頭清正ノ家中浪人ノ由、元文中より代官職 高木作右衛門 「御銀役御用物方御武具蔵御船蔵リ御菓園寺社御米方掛リ聖堂支配」 生国歴々ノ浪人之由、今四郎兵衛先祖也 高嶋了悦</p>

	<p>同 一説ニハ剃髪シテ了賀ト云、今作右衛門先祖トモ云、正説如何、 高木勘右衛門 高木清右衛門 町田宗賀 白倉如庵 吉岡一類 馬場一類 深川〔須川〕・山本ノ一類</p> <p>此跡役高木彦右衛門、 右ノ外ニ</p>
<p>「長崎実記年代録」 文化元年（1804）まで。 阿蘭陀通詞か（解題：岩崎義則）</p> <p>『長崎実紀年代録』 九州文化研究所史料 集刊行会 1999</p>	<p>●元龜元庚午年 【イb】今年長崎ニ南蛮船着船始テ着船す、去ル天文十二年隅州に着岸、己後九州諸所ニ往來せし処、向後此地を渡海之湊に定メ度旨、領主大村氏ニ訴しなり。</p> <p>●元龜二辛未年 【ウb】今年も南蛮船着岸し去年願入シ趣大村理專許諾有之、三月家來友永對馬を出遣し当表ニ地割を始め、嶋原町、大村町、文知町、横瀬浦町六町建之。其後、博多町、樺島町、五嶋町〔今町説〕、内下町出来し、二十余町〔年〕を経テ文録〔録〕之始ニ至り二十三町出来ス、</p> <p>【G】町々頭人ニ者、高木勘左衛門、後藤惣太郎、高嶋四郎兵衛、高木新七、町田宗賀、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄右衛門等也。此内高木・高嶋・後藤・町田四人後年寄ト成ルナリ。</p> <p>●天正十五丁亥年 ○今年秀吉公為嶋津征伐九州ニ発向有シ、帛陣ノ砌筑前博多ニ駐駕成ス処、長崎ノ頭人共御目見願トシテ博多ニ到シニ無礼ノ事アリ、其上彼者共年來南蛮船ヲ相着ケ切支丹ノ邪法ヲ信仰シテ神道仏法ニ敵對シ堂社ヲ破却セシ事御耳ニ達シ、甚以不法至極ナリト急度追返サレ、長崎表ニ藤堂佐渡守差遣サレ邪宗門御制禁之旨御條目ヲ以テ被仰渡、伴天連共早々令帰國ノ旨被仰出候。</p> <p>●天正十六戊子年 ○今年重テ寺澤志摩守・藤堂佐渡守兩人当表ニ被差越長崎ヲ御料所ニ被仰付、地子御免除ノ御朱印下シ賜リ〔為〕御代官鍋嶋飛騨守ニ長崎ヲ御預ケ置ル、</p> <p>【I】依而長崎中ヨリ毎年頭人之内老人宛出府シ、年頭シテ御礼相勤之。</p>
<p>通航一覽 嘉永六年（1853）序 林復斎（儒学者・幕 府外交官）</p> <p>『通航一覽』第四 清文堂出版 1967</p>	<p>【ウb】長崎は三方山高ク海深く、風波穩にして入津交易し、自後これを渡津と定めん事を請ふ、領主（大村）理專これをゆるし、明年（元龜二年）より家人友永對馬に命じて市井を開き、島原町・大村町・外浦町・平戸町・文知町・横瀬浦町六町これを建、其後博多町・樺島町・今町・五嶋町・内下町を建添、二十余年を経て、文禄の初にいたり、二十三町となる。</p> <p>【G】町の頭人は、高木勘右衛門、後藤惣太郎、高島了悦、高木新七、町田宗賀、白倉如庵、吉岡九郎兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門等となり、此内高木・高島・後藤・町田四人年寄となる、爾來逐年繁榮せり。</p> <p>【ウb】元龜二辛未年より、長崎地割始り六町出来し、年々地形を開き、町屋敷を建廣め、文禄の比迄に二十三町出来す、但、天正十六年、長崎御料所に被仰付、地子銀御免除の地と成る、是を内町と稱す。</p>
<p>「崎陽略記」 「長崎古今集覽」上 より</p>	<p>○元龜元午年、南蛮の黒船、津の西浦福田と云所ニ而商売す、其時此湊を見て、三国無双の地と譽め、是世界繁華末頼母捕と云、明年よりハ必渡海之湊に定べしと約束せし所より、</p> <p>【イb】翌元龜二年、大村利仙の家臣友永氏をして、初而地を割而商宅を經營せしむ町数六町、則其夏亞嗎湊の黒船三艘入津して、是より毎年五七艘、又ハ拾艘入津して今の繁榮の地とハ成たる也。</p>

4. 「長崎港草」 亞系史料

<p>「長崎港草」 寛政四年（1792） 熊野正紹（郷土史家）</p> <p>丹羽漢吉・森永種夫 校訂『長崎港草』長 崎文献叢書第一集第 一卷 長崎文献社 1973</p>	<p>●烏船來ル長崎ニ ○扱黒船八年ゴトニ福田ニ來着アリシカドモ、此處ハ風波烈シク船カトリモ悪シム、何レノ港ニテ風波ノ凌ぎ安キ所アルトヤ尋ネ求レドモ心ニ叶フ港ナシ、然ルニ蛮夷初メテ此港ヲ見ルニ滄海底深フシテ三方ハ山高クサラニ風波ノ患ナシカトル宜キ港亦アルベカラズトテ永禄十二年戸町浦ニ入來リ、元龜元年此深江浦ニ乘入ケレバ諸國ノ商人等競ヒ來リ交易セイカバ地モ賑カニナリヌサレバ、此地ヲ以來交易之場ト定メ入津セシメバ逾々繁昌スベシトテ、</p> <p>【Aa】元龜二年島原ヨリ有馬修理太夫義純入道專岩當所ニ來リ、大村理專民部入道ノ家臣友永對馬ヲ差越サレ、當地ノ邑長立合ニテ町割アリ。</p> <p>【カ】因テ諸方ノ者ドモ同國ノ者ヲ一ニ集メ小屋架ケシテ其在所ノ名ニヨリテ町ノ名トス。則森崎ト一ノ堀ノ間ニ島原町、大村町、平戸町、横瀬浦町、文知町トテ六町建、是町建ノ始也横瀬浦町ハ平戸町ノ内ニ入文知町ハ外浦町ノ内トナル。</p> <p>【E】頭人四人アリ、高木勘左衛門、高島了悦、後藤惣太郎、町田宗賀也。或ハ云高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎後高島四郎兵衛ト云也、外ニ町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡佐兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰之介、笛田新兵衛等十一人アリ、</p> <p>【D】此時高木・高島・後藤・町田當所ノ頭人ニテ十八年ノ間町中ノ支配ヲ司ル。町数ハ続ヒテ多ク建並ヒ、近國ハ云ニ及バズ京大坂堺津々浦々ノ物マデモ來リ聚リテ繁昌之地トナル。</p> <p>【B】島原町ハ有馬修理太夫之ヲ建ツ。大村町ハ大村理專建之。平戸町ハ日浦與左衛門建之。横瀬浦町ハ横瀬浦與五左衛門コレヲ支配ス。文知町ハ以前ヨリ文知ノ宅大ナル故名トス。</p> <p>【カ】一云其後諸方ヨリ來リ集リシ商人或ハ國々ノ浪人等、望ニヨリテ其國々ノ者共ヲ一ニ集メ、其國々ノ者共ヲ一ニ集メ、大村町・島原町トス。樺島町・外浦町</p>
--	---

	<p>モ銘々其生所ヲトリテ名ヅク。  <b>【K】</b>此ノ如クシテ、廿餘町トリ立十九年ノ後天正十六年ニ公領トナル。鍋島飛騨守支配タル四年、文禄元年寺澤志摩守奉行トナリ、邑長四人ヲユルシテ町年寄ト名付ラル。於是町數廿三町也。其比マデニハ外町ハ皆田畑也。</p>
<p>「長崎名勝図繪」  文政年間（1820）頃  饒田諭義（長崎聖堂助教。熊野正紹の子息）  丹羽漢吉訳  『長崎名勝圖繪』  長崎文献叢書第一集  第三卷 長崎文献社  1974</p>	<p>●賀蘭館  ○永禄十二年戸町浦に来航、翌元龜元年この深江浦に乗り入れて来たので、諸国の商人が集まって来て、商売をし賑わった。  <b>【A a】</b>それでこの地を交易の場と定めて、入津させれば、いよいよ繁昌するであろうと、元龜二年島原から有馬修理大夫義純入道専岩、大村から大村理専の家臣友永対馬が来て、当地の支配者立合いで町割りがあり、  <b>【カ】</b>その町割りによって、それぞれ同国同地方の者が一所に集まり、自分らの在所の名をとって町名としたその結果、森崎と一の堀の間に島原町、大村町、平戸町、横瀬浦町、外浦町、文知町の六町ができた。これが町建の始めである。  <b>【E】</b>その頃の頭人は、高木勘左衛門、高島了悦、後藤惣太郎、町田宗賀という四人であった。一説では、高木新七、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎の四人とする。その外に、町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡左兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰之助、笛田新兵衛の十一人がある。</p>

5. 「長崎略記A」系史料

<p>「長崎略記A」  歴博13618  「長崎始由来記・長崎略記」  承応二年（1653）まで記載</p>	<p>●長崎町建始め并南蛮船始而長崎に来る事  <b>【B】</b>永禄十年より五年目の事也。元龜二年の末、嶋原・大村之當主相謀りて商賣人入来而右に六丁町を企る也。  島原町 有馬氏御越且造主  大村町 大村理専 同様  平戸町 平戸出生 日野浦与左衛門居住  横瀬浦町 同頭 横瀬浦五左衛門居住  外浦町 同頭 同人屋敷あり後ニ乙名役  文知町 同頭 文知坊居住  ●長崎之頭人役十六人有りて諸事を支配す  <b>【E】</b>高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、町田市郎兵衛、白倉怒[如]庵、山本庄左衛門、佐々木茂四郎（欄外書入：後ニ高島四郎兵衛）、須川主水、笛田新兵衛、長江浦五左衛門、吉田[岡]九兵衛、横瀬浦五左衛門、日野浦与左衛門、深江辰輔、馬場甚兵衛、平戸屋文知坊。  ○右之人籍は当所出生、或は他国浪人、皆悉長崎甚左衛門一味同心之人也。甚兵衛ハ徒弟也。辰之助ハ大友家而五百石領之落人也。……</p>
<p>長崎邑略記  外山幹夫2011より</p>	<p><b>【B?】</b>永禄十年ヨリ五年日ニ當テ、元龜二年末三月ニ島原・大村両主相談之上ニテ、諸商人入来故ニ六丁ノ町ヲクワツ、……（以下、外山引用により明確でない）  <b>【E】</b>長崎の頭人役十六人アリテ、諸事支配す、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、町田市郎右衛門、白倉怒[如]庵、山本庄左衛門、佐々木茂四郎後ニ改ム、高島四郎兵衛、須川主水、笛田新兵衛、長江浦（ママ）五左衛門、横瀬浦五右衛門、日野浦与左衛門、吉田[岡]九兵衛、深江辰之助、馬場甚兵衛、平戸屋文知坊</p>

6. 「長崎縁起」系史料

<p>「長崎縁起略記」  正徳二年（1712）  『続々群書類従』  第八 国書刊行会  1906</p>	<p><b>【A a】</b>爰に長崎繁昌の始は永禄十年卯八月二十三日異国の商船に加里用陀という船来り、當浦に始て入津す、是より諸国の人来り集り交易す、是に依て元龜二年末三月島原・大村等の者相謀りて、森崎より一の堀の間に六町[丁]の町を立始て、異国交易繁榮の地と成るなり。  <b>【A b】</b>依て元龜二年末三月には此六丁の町立始るなり、島原より有馬修理大夫義純専岩入道越されたり、大村より理専名代として友永対馬という者来り、當地の村長等高木・後藤・高島・町内[田]共に立合て森崎と一の堀の間に六丁の町建始る。森崎とは今の西役所なり。  <b>【B】</b>六町とは島原町有馬修理大夫是を建つ、大村町大村理専是を建つ、平戸町日野浦与左衛門是を建つ、横瀬浦町・外浦町二町は横瀬浦與五右[左]衛門といふものは是を乙名とす、文知町則ち文知といふ者、其前より家居大にて有る故に町の名とす、是町割の始なり。  <b>【E】</b>其頃當地の頭には、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎、高島四郎兵衛という以外に、町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰之助、笛田新兵衛と云者也。  ○如何ぞ此時他郡に移る事あらんや、本博多の者共多く當地に逃げ来り居住するによりて博多町と名付く、最も六町建て後、内下町、五島町、本博多町とて當地の町方草創はじめの町どもなり。  <b>【奥書】</b>正徳二年辰年仲春、長崎光寿山正覚寺禿法昭記</p>
<p>「長崎由来記」  歴博131230  正徳二末年（1712）  正覚寺禿法※未年だと1715年</p>	<p>長崎由来記（内題）  <b>【A a】</b>爰に長崎繁昌の始りは、永禄十年卯年八月廿三日、異国の商船カリヤウタといふ船来り、當浦に始て入津ス。是より諸国の人来り集り交易ス。依て元龜二末年三月島原・大村・當地の者とも相謀て、森崎と一の堀の間に、六町の町を立始て、異国交易繁榮の地と成也。  <b>【A b】</b>依て元龜二年末の三月は是六丁の町始也。島原より有馬修理大夫義純入道専岩越されたり、大村より理専の名代として友永対馬といふ者来りて、當地の邑長等高木・後藤・高島・町田等といふ者共に立合て、森崎と一の堀との間に六丁の町を建始</p>

	<p>メたり、森崎といふは今の西役所也。是當時町割始也。  <b>【B】</b>六丁町とハ島原町有馬修理太夫建之。大村〔町〕ハ大村理専是を建之。平戸町ハ口〔日〕浦与右衛門といふ者を乙名として、文知町〔ハ〕文知といふ者あり、以前より家居大きく有故之町の名とす。是當時町割始也。  <b>【E】</b>其比當地の頭には、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎、高島四郎兵衛といふ也。己上前に、町田市兵衛、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、長江五左衛門、深江辰之助、笛田利兵衛と云者也。  <b>【奥書】</b>正徳二未年仲春二月、長岑由来記全終、肥長光寿山正覚寺禿法 著述</p>
<p>「長崎之記」      歴博1361      正徳二未年（1712）      正覚寺禿法※未年だと1715年</p> <p>渡辺庫助1964より</p>	<p>長崎記（内題）  <b>【A a】</b>爰に長崎繁昌之始ハ、永録十年卯八月廿三日、異国の商船に加里用陀といふ船来り、當地に初て入津す。是より諸国の人来り集り交易す。依て元龜二年未三月、嶋原・大村・當地之者共相謀りて、森崎と一の堀の間に六丁の町を立初て、異国の交易繁榮の地となしを里。  <b>【A b】</b>依之元龜二年未三月ハ是六丁町の立始也。嶋原より有馬修理太夫義純専岩入道越れたる。理専名代として友永対馬と云者来て、當地邑長高木・後藤・高嶋・町田ともに立合て、森崎と一の堀の間に六丁の町を建初む。森〔崎〕とハ今の西政所也。  <b>【B】</b>六丁町とハ島原町有馬修理太夫建之。大村町大村理専建之。平戸町日浦与左衛門建之。横瀬〔浦〕町・外浦町二丁ハ横瀬〔浦〕与左衛門と云者を乙名とする処也。文知町ハ則文知と云者は前より家居大成。  <b>【E】</b>其比當地の頭には、高木新七市、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎、高嶋四郎兵衛といふ。以上外に、町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡九郎兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵、浦上与兵衛、長江五左衛門、深江辰之介、笛田利兵衛と云者共也。      ○本博多町の者共ヨリ以前大友竜造寺大合戦の時離散したる博多の者共多く當地に逃来り居所とするに依て博多町と名付、尤六丁を建て後内下町五島町本博多町とて當地方創の始の町共也。  <b>【奥書】</b>正徳二未年仲春日、長崎光寿山正覚寺禿法 眼記      右天保十一子年 長崎在勤中写し、嘉永四年辛亥の仲夏、同六年癸丑初冬写し</p>
<p>長崎記：禿法      正徳六年（1716）      歴博13198-1</p> <p>〔表書〕正徳六丙申年二月 正覚寺住僧禿法記之</p>	<p>●元龜二年春者  <b>【A a】</b>即チ三月ナリ。大村ヨリ利仙名代トシテ友永対馬云者来り、嶋原ヨリハ則城主有修理太夫越レテ、爰ニ當地ノ者共立合テ町割アリ。茂木に見峠モ此時開ナリ。      ●六丁町者  <b>【イ b】</b>嶋原町、大村町、平戸町、外浦町、横瀬浦町、文知町也。此内文知町ハ外浦町ニ入ル。横瀬浦町ハ平戸町ノ内ニ入ル。是六丁町ノ立始也。  <b>【E】</b>其比當所ノ頭ハ、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎後高嶋四郎兵衛ト云、其外ニ、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛長崎氏ノ者也、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵ハ其節町別當伝、又外ニ、浦上与兵衛、長江五左衛門、笛田新兵衛伊奈佐氏又ハ稲佐ト云、横瀬浦與五右〔左〕衛門風俗兼全人柄也ト云。      ※風俗兼全人ガラナリ：行儀作法よしく申し分ない人物  <b>【奥書】</b>干時正徳六年申年二月、正覚寺住僧天霖記      寛政五年九月十九日、廣濟寺寂寂隆 写 ※このときに見出し名を入れたか</p>
<p>「長崎略縁起」      正覚寺住僧禿法か      「長崎古今集覧」上      文化八年（1811）      より</p> <p>福田忠昭1937      古賀十二郎1957      渡辺庫助1964      より</p>	<p><b>【A a】</b>爰ニ長崎繁昌ノ初ハ、永禄拾年卯八月廿三日、異国ノ商船ニ加里用陀ト云船来り、当浦始テ入津ス、是ヨリ諸国人来集リ交易ス、依レ之元龜二年未三月、島原大村當地共相謀テ、森崎ト一ノ堀ノ間ニ六丁ノ町ヲ立始ル、異国交易繁昌ノ地ト成ケル、  <b>【A b】</b>依て元龜二年未三月には、六丁町の立始也。即島原より有馬修理太夫義純専岩入道越されたり。大村よりは新八郎理専の名代として友永対馬と云者来る。當地の邑長共に相謀て、森崎と一の堀の間に、六丁の町を建始む。森崎とは、今の西政所也。  <b>【B】</b>六丁町とは、島原町、有馬修理建大夫立之。大村町、大村理専立之。平戸町、日ノ浦与左衛門立之。横瀬浦町、外浦町二丁は、横瀬浦与五左衛門といふもの、乙名とす。文知町ハ、則ち文知といふもの、この前より家居大ニして有るゆへに、町の名とす。是當地の町割の始なり。  <b>【E】</b>其比當地の地頭には、高木新七郎、高木勘右衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎後高嶋四郎兵衛と云、その外ニ、町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄右〔左〕衛門、沼喜田小庵、浦上与兵衛、長江五左衛門、深江辰之助、笛田新兵衛也。此等長崎草創之者共也。皆諸国半人流落して此ニ集ル。最〔モ〕此中、元来當地之者もあり。      ○又馬場甚兵衛と云ハ、則長崎甚左衛門が従弟也。則長崎氏の者也。後大浦村に行き名字を改めて、田川勘右衛門と云もの是也。其子勘右衛門ハ、処の代官を勤めたり。      ○又世上の説に天正十五年公領になさる故に筑前博多のものども多く来り居住して博多町を建たりといへり。…（中略）…本博多の者共多く當地に逃げ来り居住するによりて博多町と名付く、最も六町建て後、内下町、五島町、本博多町とて當地の町方草創はじめの町どもなり。</p>
<p>「長崎縁起略」A      享保年中（1716-35）</p> <p>正覚寺隠居蓮池院      （浄遍）からの聞書</p> <p>浄遍=禿法（住職1698-1725）      蓮池院（隠居1716-1754）</p>	<p><b>【A a】</b>爰に長崎繁昌の始ハ永禄十年卯八月廿三日異国の商船に加里用（丹）陀と云船り當浦に始めて入津ス。依て〔之〕諸国の人来り集り交易す。依て元龜二年未三月比より嶋原・大村・當地の者とも相謀て、森崎と一の堀の間に六丁の町を建始て異国交易繁榮の地と成し也。  <b>【A b】</b>元龜二年未三月、長崎六丁町立始め、其折節嶋原より有馬修理太輔〔夫〕義統當地江越されたり、大村より理専名代として友永対馬と云者来り、當地の邑長等高木・後藤・高嶋・町田共立合て森崎と一の堀の間に六丁〔丁〕の町を建始め〔之〕たり、  <b>【B】</b>嶋原町ハ有馬修理太輔〔夫〕建て〔之〕、大村町ハ大村理専建之、平戸町ハ日浦与左衛門建、横瀬浦町外浦町と申式町は横瀬浦與五左衛門と云者を乙名とす、文知町ハ則文知と云者其所に家居大きにして有しゆへ〔乙〕名とする、是當〔當〕地町割</p>

<p>丹羽漢吉校訂『長崎虫眼鏡・長崎見聞録・長崎縁起略』長崎文献叢書第一集第五巻 長崎文献社 1975</p>	<p>の始也。 【イ b】 嶋原町・大村町・平戸町・外浦町・文知町・横瀬浦町は是を六丁町と云、横瀬浦町ハ平戸町中カノ坂より西ノ方也今ハ平戸町加へ [入] 文知町ハ嶋原町の通り也。今ハ外浦町ニ加入。 【E】 扱當地の頭人ハ、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤宗太郎、佐々木茂四郎の子息高嶋四郎兵衛、以上其外ニ町田市郎兵衛、[白倉] 如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼木 [喜] 田小庵、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰之助、笛田新兵衛也。</p>
<p>「長崎縁起評」 「長崎古今集覽」上文化八年 (1811) より 朝長1995より</p>	<p>【イ b】 六町トハ、島原町、大村町、平戸町、外浦町、横瀬浦町、文知町也。此内文知町ハ外浦町ニ入ル。横瀬浦町ハ平戸町ノ内ニ入。是六丁町ノ立始也。 【E】 其比、処ノ頭ニハ、高木新七郎、高木勘右衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎後高島四郎兵衛ト云、其外ニ、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛長崎氏ノモノ也、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵是ハ其節町別当ト云、又其外ニ、浦上與兵衛、長江五左衛門、笛田新兵衛伊奈佐氏又ハ稲佐ト云、横瀬浦与五左衛門風俗兼全人ガラナリ、○是等長崎草創ノ者共也、皆諸国牢人ノ流浪シテ此ニ集ル、最モ此中元来当地ノ者モアリ、深江辰之助ト云ハ長崎甚左右衛門先祖小太郎ヨリモ其家久シト云リ、親父深江良助ト云ハ、天文ノ比ハ豊後大友ノ臣ト成テ二千石余ヲ領スト云伝タリ、又馬場甚兵衛ト云ハ、則長崎甚左右衛門ガ徒弟ナリ、則長崎氏ノ者ナリ</p>
<p>「長崎縁起略説」(畧説) 歴博13125 寛延元年 (1748) 九月、岩崎吉兵衛道常書写本 文化五年 (1808) 八月に中尾貞治が写之</p>	<p>【A b】 依テ元龜二年未ノ三月ニハ、是レ六丁ノ町の立始メ也。嶋原より有馬修理大夫義純專岩入道越されり、大村より理専名代として友永対馬と云う者来ル。當地の邑長等と高木・後藤・高嶋・町田共ニ立合て、森崎と一ノ堀との間に六丁ノ町を建て始ム。森崎とは今の西政所也。 【B】 六丁トハ嶋原町有馬修理大夫建之、大村町ハ大村理専建之、平戸町ハ日浦与左衛門建之、横瀬浦町・外浦町ハ横瀬浦与右衛門と云者乙名とす。文知町ハ則文知と云者其前から家居大にして是を名とす。是當地地割ノ始也。 【E】 是比當地ノ頭ニハ、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎後二高嶋四郎兵衛と云。己上外ニ町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵、浦上與左衛門、長江五左衛門、深江辰之介、笛田新兵衛と云者也。</p>
<p>「長崎年来記録」 宝暦二年 (1752) 安野眞幸1992より 外山幹夫2011より</p>	<p>【イ b】 元龜二年未三月、有馬修理大夫義純專岩入道被越、大村理専病氣故名代友永対馬ト申者来ル、…… 【E】 其頃ノ町外ハ、村長サ春木右京也、町之長ハ高木両家、高島、後藤也、浦上村は庄屋高谷小左右衛門也、肝入として町郷共ニ知レ候者ハ、町田市郎兵衛、白倉如庵、須川主水、茶屋十左衛門、山本庄左衛門、沼喜田小庵、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰之助、笛井 [田] 新六也。</p>
<p>「長崎記録」 歴博13128-1 宝暦三年 (1753) 頃まで記載</p>	<p>長崎記録 (内題) 【A a】 爰に長崎繁昌之始ハ永録十ヒトノ卯八月異国の商船加理用陀ト云船始て入津して、是より諸国之商人来交易之場と成也。依之元龜二未三月に大村理専名代として友永対馬と則當地・嶋原相謀、森崎より一ノ堀迄の間六丁之町を立始し、繁昌之地となり、嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町後に外浦町ニ加る、横瀬浦町後に平戸町ニ加る。又今之船渠中程より江戸町迄の間ハ少し口濱辺なり。</p>
<p>「長崎縁起」(「長崎縁起・天馬異聞・草川覚書」) 歴博131227 明和元年 (1764) まで記載 内題は「長崎縁起略記」と記され、似た内容。 年表筆要は、明和元甲申年まで記されている。</p>	<p>長崎縁起略記 (内題) 【A a】 爰に長崎繁昌の始は永禄十年卯八月廿三日異国の商船に加里用陀という船来り、當浦に始て入津して、是より諸国の人来り集り交易す、是に依て元龜二年未三月嶋原・大村等の者相謀りて森崎より一ノ堀の間に六丁の町を立始て異国交易繁榮の地と成るなり。 【A b】 依て元龜二年未三月には此六丁の町立始るなり、嶋原より有馬修理大夫義純專岩入道越されたり、大村より理専名代として友永対馬といふ者来る、當地の村長に高木・後藤・高島・町内 [田] 共ニ立合て森崎と一ノ堀の間に六丁の町を建始る。 【B】 六丁トハ島原町有馬修理大夫是を建つ、大村町大村理専是を建つ、平戸町日浦與左衛門是を建つ、横瀬 [浦] 町外浦町二町ハ横瀬浦與五右 [左] 衛門といふものを乙名とす、文知町則ち文知といふ者其前より家居大にて有る故に町の名とす、是町割の始の始なり、なり。 【E】 其頃當地の頭にハ、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎、高島四郎兵衛といふ以上外に、町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰之助、笛田新兵衛と云者也</p>
<p>「長崎略記会釈」 歴博13353 享保年中の原本に「御奉行暦代」として、天明六年 (1786) までの記載している。この頃に書写追記したものであろう 内題が二つあり、二冊の本を合本したものであろうか</p>	<p>長崎略記 (内題) 【A b】 元龜二年未三月、長崎六丁町立始め、其折は比嶋原より有馬修理太輔義純當地江越されたり、大村より理専名代として友永対馬と云者来り。當地の邑長に高木・後藤・高嶋・町田立合て、森崎と一ノ堀の間に六丁の町を建始めたり。 【B】 嶋原町有馬修理太輔建之、大村町大村理専建之、平戸町ハ日浦与左衛門建、横瀬浦町・外浦町と申す二丁は横瀬浦与左衛門と云者乙名とす。文知町ハ則文知と云者其所に家居大きなりて有し故名とする。是當地町割の始也。 【イ b】 嶋原町・大村町・平戸町・外浦町・文知町・横瀬浦町、是を六丁町と云、横瀬浦町ハ平戸町中ノ坂より西ノ方也。今ハ平戸町加入。文知町ハ嶋原町の通り也。今ハ外浦町に加入。 【E】 扱當地の頭人は、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤宗太郎、佐々木茂四郎子息云う高嶋四郎兵衛、己上外其外に、町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼木田小庵、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰之助、</p>

	<p>笛田新兵衛也。 長崎畧記(内題) ○右此記者正覚寺隠居蓮池院享保年中之比、法席之席ニ長崎略記会積いたされし聞書等を交エ書写としむる者也。 ●南蛮船初而南蛮船長に來事并内町建始之事 【イb】元龜二辛未年、大村理專家來友永對馬見分之上町割いたす。 嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町後外浦町に加る、横瀬浦町後平戸町に加る、右六町之分初めて町割致す。其後に町家出来る也。 【F】●長崎町建始よりし役頭 生国筑前牢人 末次興善 長崎代官職 同 平藏 生国芸州牢人 村山東庵 近国歴々之御牢人の由 高木作右衛門 同 高嶋了悦 同 後藤惣太郎 高木勘左衛門 高木清右衛門 町田宗賀 白倉如庵、吉岡一類、馬場一類、深川・山本之一類</p> <p>右之外ニ</p>
<p>「長崎縁起略」B 歴博13124 年歴には文政元年(1818)まで記す 1716年に書写追加</p>	<p>【A b】元龜二年未三月には、是六丁町の立始也。嶋原より有馬修理太夫義純專岩入道越されたり、理專名代として友永對馬と云うもの來る。當地の邑長等、後藤惣太郎、高木勘左衛門、高嶋四郎兵衛、町田市郎兵衛裡に云共に立合て、森崎と一ノ堀ノ間に六丁ノ町を立はしむ。森崎とは今の西政所也。嶋原町、大村町、文知町、外浦町、横瀬[浦]町メ六丁也。 【奥書】正徳二年未仲春日、享保十一丙年十月吉辰、崎陽正覚後堂禿法</p>
<p>「長崎略記」B 歴博13199-1 文政元年(1818)頃まで記載</p>	<p>【A b】元龜二年未二月長崎六丁町立始、其折節嶋原ヨリ有馬修理太輔義純當地に越されたり、大村ヨリ理專名代として友永對馬ト云者來り、當地の邑長共高木・後藤・高嶋・町田等立合て、森崎ト一ノ堀ノ間に六丁町を建始メたり、 【B】嶋原町有馬修理太輔建し、大村まち大村理專建之、平戸町八日浦與左衛門建之横瀬浦町・外浦町ト申二町ハ横瀬浦與五左衛門ト云者を乙名とし、文知町ハ則文知ト云もの其所に家居大きにして有りし故名とす、是町割ノ始め也。 【イb】嶋原町、大村町、平戸町、外浦町、文知町、横瀬浦町是を六丁町と云、横瀬浦町ハ平戸町中ノ坂ヨリ西ノ方也、今ハ平戸まちニ加江入、文知町ハ嶋原町ノ通りなり今ハ外浦町ニ加江入。 【E】扱当地頭人は、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤宗太郎、佐々木茂四郎子息高嶋四郎兵衛、以上其外ニ町田市郎兵衛、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼木[喜]田小庵、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰ノ助、笛田新兵衛也。</p>
<p>「筑紫長崎縁起」 外山幹夫2011より</p>	<p>【E】当地ノ頭は、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎後ニ高島四郎兵衛ト云、已上外ニ、町田市郎兵衛、白倉如庵[庵]、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、須川主水、山本庄左衛門、沼喜田小庵[庵]、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰之介、笛田新兵衛。是等長崎草創ノ者共也、皆諸国牢人流浪シテ此ニ集ル、最モ此中元來當地ノ者モアリ、</p>
<p>「長崎旧記後考」 歴博130107 暦代として文政元年(1818)まで記載</p>	<p>長崎旧記後考(内題) 【イb】元龜二未年三月に町六丁を立始め、其頃島原之城主有馬修理太夫殿差越、嶋原[町]を立らる、大村町ハ大村理專立らる。 【B】平戸町は日浦與左衛門、横瀬浦町・外浦町式丁ハ横瀬浦五左衛門ト云者町長と成。文智町ハ文智と云うもの其所に有し故名とす。横瀬浦町といふは中之坂より西之方也。今平戸町に加る。文智町は嶋原町の通りなる。今外うら町に加る。 【E】其頃の頭人、高木新七郎、高木勘左衛門、後藤惣太郎、佐々木茂四郎子息高嶋四郎兵衛、其外町田宗賀、白倉如庵、吉岡九兵衛、馬場甚兵衛、深[須]川主水、山本庄左衛門、根木田[沼喜田]小庵、浦上與兵衛、長江五左衛門、深江辰之助、笛田新兵衛なり。</p>
<p>「長崎雜記」(襟記) 歴博13350 天保九年(1838)まで記載</p>	<p>【A b】元龜二〇未〇三月六丁町始而成。老番嶋原より有馬義純御地差越、大村ハ名代として友永對馬と云者來、當地の邑長高木・後藤・高嶋・町田共立合て、嶋原町ハ有馬より立、大村町ハ大村より立、 【B】平戸町八日浦與左衛門、横瀬浦町外浦町のに町についてハ横瀬浦浦右衛門ト云者乙名として、文知町は文知ト云者其前より家宅をきく構いをし故、右を名として、是長崎之町割之始也。則嶋原町、大村町、平戸町、外浦町、文知町、横瀬浦町、是を六町と云い、横瀬浦町ハ〇……………今ハ横瀬浦町ハ平戸町ノ内ニ加え、文知町ハ今の嶋原町之通り也、今ハ外浦町に加え(る)。</p>

#### 7. その他の史料

<p>「古集記」 歴博へ13221 元禄十一年(1698)までの記載</p>	<p>【K】文禄元辰年より、高木勘右衛門作右衛門祖、高島了悦惣左衛門祖、後藤惣太郎庄左衛門祖、町田宗賀此跡役高木彦右衛門法體して、道感といふ、今の彦右衛門祖也。四人始て町年寄の號御免。</p>
<p>「崎陽群談」 享保元年(1716) 大岡清相(長崎奉行)</p>	<p>●長崎開基、内外町割并年寄、常行司來由之事 ○永録(禄)の末元龜の始に當りて、西南の商船不図此津に入來り、湊内風波の愁なきを便として、此地に滞留し、頗貨物を買易(朱・買敷)し、夫より後年々に</p>

<p>1710-1717)</p> <p>中田易直・中村質校 訂『崎陽群談』近藤 出版社 1974</p>	<p>此津へ入来るかゆへに、京・堺の商人も、又此地江来りて彼貨物を買取、漸々繁昌の地とは成行ぬ、其折しも、肥前の州大村の城主は、藤原純友か後胤大村民部少輔純忠、剃髪の後理専といひて、武略等類に將の器にあたりたる人ありし、此人近国の良將と挑戦ふといへとも、領地分狭くして、士卒少しく、寡ハ衆に敵しかたきかゆへに、いつも危急の難に逼り、此防きをなさんか為に、西南蛮の人によつて鳥銃の術を伝へ、夫より後ハ戦ふ毎に勝利を不得といふ事なかりしよし、此故に理専と甚左衛門嫁娶の縁を結び、互ひに力を合せて武威を顕し、各家をたもちたるよし、然るゆへに大村の家人友永対馬といひしもの、はしめて此地の街衛をわかち、商家を創立せしとなり</p> <p>【ア】天正の末ニ至リテ、太閤秀吉朝鮮征伐の事発り、秀吉みつから肥の前州名護屋の城ニ滞留ありし比、長崎甚左衛門何某彼地ニ行て秀吉へまミへ、はしめは領地相違あるへからさるの沙汰有し処、後ニいか成故か有けん、彼仁左衛門名護屋におゐて忽ニ殺害ニ逢、夫より子孫共ニ此地を逃散して、甚左衛門か家ハ爰におゐて断絶しぬ。</p> <p>【J】文録〔禄〕元年の比、秀吉の命として寺沢志摩守ニ此所を預けられしにより、寺沢の家人岡崎権平・谷山源藏といふものを差置き、事を執行ひしよし、昔日甚左衛門ニ属したる地士のうち、高嶋了悦今の作兵衛か祖なり、高木勘左衛門今の勘兵衛か祖なり、後藤小太郎今の宗左衛門か祖なり、町田宗賀此家ハ断絶といふもの、思ひ（「忍敷」）居たるを寺沢より呼出し、町中の頭人と相定め、町々の差引を是等の者ニ任せたる、其間ニ取立たる町を内町と号け、其後十年余を経て此地公領と成り其頃猶も秀吉一統の内故、……</p> <p>【L】慶長の末御当官御治世ニ至りて、はじめて旗下の歴々を以て奉行と相定められ、此地ニ差下されよし、其時節高嶋・高木・後藤・町田の者共を町年寄とは号けぬ、其子孫今ニ至りて町年寄の職を相勤る事には成り侍りぬ、</p>
<p>「長崎雑誌」全 歴博13421 寄陽勝木枕山著述 勝木枕山(1704-84) 安永七年(1778)まで 記載</p>	<p>長崎雑誌(内題)</p> <p>【イb】肥前州彼杵郡長崎ハ西海の辺鄙なりといへど、山川明秀美ニ無双の湊也。元龜二年始て蛮舶来り其勝景を嘆美し悦、是毎歳渡海して交易をなせり、今蕃夷の船舶貿易の地となるの基也。同二年嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町、横瀬浦町を興立し、岡を平にし沼を埋て街中成。繁華の邑とはなれる也。故ニ京師・江戸・大坂・泉堺・長崎を加五国の大都会ニ號す。</p>
<p>「長崎縁起略評」 安野眞幸1974より</p>	<p>○是等長崎草創ノ者共也、皆諸国牢人流浪シテ此ニ集ル、最モ此中、元来当地ノ者モアリ、深江辰之助ト云ハ、長崎甚左衛門先祖小太郎ヨリモ其家久シト云リ、父親深江九良助ト云ハ、天文ノ比ハ豊後大友ノ臣ト成テ二千石余ヲ領スト云伝タリ、又馬場甚兵門ト云ハ、則長崎甚左衛門ガ徒弟也ナリ、則長崎氏ノ者ナル。</p>
<p>長崎年曆両面観 歴博13398 打橋竹雲 文政十一戊之冬 (1828)</p>	<p>●元龜庚午 永禄十丁卯年唐船始テ長崎ニ来る 今年南蛮船始テキタル</p> <p>●元龜辛未ニ 【イb】大村理専家来友永対馬町割ス 島原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町、横瀬浦町出来ス 南蛮船来ル</p>
<p>長崎年曆 歴博シ13235 天保元庚寅年(1830) まで 明治十四年写之</p>	<p>●元龜元庚午 永禄十丁卯年唐船始テ長崎ニ来、今年南蛮船始テキタル 領主大村理専</p> <p>●元龜二辛未 【イb】大村理専家来友永対馬町割ス 島原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町、横瀬浦町出来ス、 南蛮船来ル</p>

8. 町年寄関係史料

<p>町年寄発端由緒書</p> <p>清水紘一「史料 町年寄発端由緒書」 『中央大学論集』第13号 1992</p> <p>宝暦三年(1753)にいたる迄の史実を伝えるもの</p>	<p>○私共御役儀之儀は、先祖高木作右衛門入道了可、後藤庄左衛門入道宗印、高嶋四郎兵衛入道良悦、町田惣右衛門入道宗賀、四人の者共、永禄之頃当地江罷越頭人ニ罷成申候。其頃は、長崎甚左衛門と申者、長崎村之内唯今桜馬場村ニ罷成城山と申所ニ小キ城ヲ構、堂門川より唯今西山村之内天神川と申候東北之方領知仕罷在候。西南之方は私共先祖之共四人支配仕頭人ニて御座候。尤右之内ニも大村利専、深堀茂宅其外俣天連共寺領等も御座候由傳候。</p> <p>【M】天正七己卯年、私共先祖高木了可、後藤宗印、高嶋良悦・町多〔田〕宗賀、長崎甚左衛門と不和ニ罷成候付、毎々甚左衛門と取合御座候處、終ニ甚左衛門打負長崎を退散仕候故、其跡共ニ私共先祖之者共支配仕地頭と罷成申候。</p> <p>○天正十五丁亥年、太閤秀吉公御征伐九州御下向被成候節邪宗門之徒御刑罰被成、右之寺領等被召上候節長崎一圓公領と相成候付、為御上使寺澤志摩守殿御越被成候。尤其節、長崎内町中地子御免被仰付候。太閤様、私共先祖之者共江御朱印被成下候。其後、文録年中太閤様朝鮮為御征伐、肥前国名護屋江御在陣被遊候節、長崎近來御料ニ相成候付度々御用被仰付、依之頭人共之内為伺御機嫌名護屋迄罷出處、其頃迄は毎度近郷より押懸ヶ乱妨仕候。付昼夜相防頭人之内罷出候ては難相成候付、其頃村山安等と申者安藝国生之者ニて、万事取廻宜敷發明成者ニ付、頭人共方江心安出入仕候故。此者為名代名護屋江差上、白米百斤・紙子捨端・毛氈五枚献上仕候。然ル處、安等儀太閤様御手前自分頭人之様ニ申上、献上物等仕色々才覚を以尊慮ニ相叶。名を等安と改、長崎領御免地之外は自分請地之儀願申上、為運上銀貳拾五貫目可差上旨申談。後藤宗印罷出候處、其頃長崎近郷と取合多、宗印儀勤勞仕候段太閤様達御聴於御陣所御目被渡、御紋付之五陣羽織拜領仕候。当地御預寺澤志摩守殿御代ニて御座候。</p> <p>【K】其後、等安儀は御代官と役目被相改、私共先祖之者共ニは、御免地之分致支配、町年寄と役名被相改候。</p>
--	---

## 【あとがき・謝 辞】

今回の論稿では、文献史料から「長崎町建て」をめぐる歴史事象を読み解き、史料をテキストとして実証と解釈したことについて先覚者の方々と対話しながら議論させてもらうという気持ちで検討を行った。これまでに経験したことがない有意義な機会をもつことができたと思っている。

そのことで多くを学ぶことになった先覚者のなかで、古賀十二郎氏が「長崎名誉市民」の榮譽を固辞されて、76歳で生涯を閉じるまで研究を続け執筆に専念されていたことを知った（中嶋幹起 2007）。中嶋氏は古賀氏の業績のなかで、1925年に刊行された『長崎市史 風俗編』について、1929年に創刊された『アナル』誌を中心とするフランスの「アナル学派」の「社会史」研究に先行する視点をもって書かれた名著であると評価されている。私自身も古賀氏が亡くなった年に近づきつつあるが、古賀氏が持ち続けられた研究姿勢を範として、これからも研究に専念したいと思っている。

長崎には、開かれた研究の場として「西海考古」がある。そのことで、私たちは研究し執筆を続けることができる。そのような場を提供しておられる、主宰の古門雅高氏、渡邊康行氏に深く感謝を申し上げます。

## 【註】

註1 安野氏は、『長崎根元記』の「則元亀二年に町割をなし、国々より集まる所の名によせて、其集る所の者は一所に置、或は豊後町・大村町、或は平戸町、或は五島町などと名付け、町之頭人を定」という記事を引いて、「通説では後に「内町」に入るとされるⅢ地域の「豊後町」「五島町」が『長崎根元記』ではⅡ地域の「六丁町」の「大村町」「平戸町」と共に、元亀二年の町割と同時にできたのである。このほか「樺島町」が最初にできたとする記録もある。通説に立てばこれらは皆〈誤り〉となろう」（安野 1992 P. 184）としている。

しかし、『長崎根元記』の記事は、国々から集まった所の名前を町の名としたということを述べている〈カ〉の記事の〈系統〉であって、長崎の最初に出来た町の話ではない。安野氏が「樺島町」が最初にできたとして記録として渡辺庫助氏の『長崎陽論攷』（『崎陽論攷』が正しい）を挙げているが、渡辺氏は『庫物長崎記抜萃』の「元亀貳年町割シ夫付島原町大村町平戸町樺島町此分立初」の記事を引いて、「このとき樺島町が出来たといふのは誤である」（渡辺 1964 P. 325）と指摘されている。原著者の指摘を踏まえた正しい引用を行うべきであろう。

註2 松本四郎氏は、著書『日本近世都市論』（東京大学出版会）のなかで、貿易都市長崎について、長崎の数万人規模に発展した町の人口に対して、長崎奉行支配下の村々の石高は3200石にすぎないため、17世紀をとおして、長崎への米の供給事情は、かなり不安定であったことを指摘し、長崎という町がそもそも農村経済の一定の発展の結果できた都市でなく、政治・宗教・貿易といった外的要因によってつくられた町であるために、歴大な都市人口が消化する飯米の供給が権力によって保証されなければ、町そのものが維持できなかったとしている（松本 1983）。長崎が、独占的な貿易利権をもつことで繁栄する一方、政治・宗教・貿易といった外的要因で創られた貿易都市であるため、食糧供給について外部に頼らざるを得ない、あやうい基盤の上に成り立っていたということである。

註3 渡辺庫輔氏は、長崎県立長崎図書館の罫線用紙に写した『長崎鑑』を見て、『続長崎鑑』より古いものではないとしている（渡辺 1961）。現在、長崎歴史博物館では、正徳元年に書写された『続長崎鑑』の史料が閲覧できる。本稿では、『続長崎鑑』が『長崎鑑』を参考にして成立したことを推察した。

註4 渡辺庫輔氏は、『庫物長崎記抜萃』という書名を使っているが、この書が「当時の奉行たる岡野孫九郎か牛込忠左衛門に「呈書」されたのであろうか」と推測している（渡辺 1961）。そうであれば、『庫物長崎記』は長崎奉行から命じられて編纂された書物であった可能性が考えられる。

註5 平戸島の平戸港に、平戸瀬戸を挟んで面する平戸市田平町山内免にある浦が「日ノ浦」である。日浦与左衛門は、日ノ浦出身の平戸商人であった可能性が推測される。「日浦」あるいは「日野浦」と表記されたのであろう。

註6 外山幹夫氏は、長崎の遺跡で、12・13世紀の中国製青磁などが出土していること、文献史料に永禄元年、同五年に中国船が来帆している記事があることから、長崎港は元亀年間以前から内外の人々によって利用され

ていたのであるから、元龜年間が長崎開港の時とするのは、あまりにも南蛮貿易偏重史観という他はないとして、元龜二年は「開港」というより、新たに南蛮貿易港として出直したに過ぎないと指摘されている（外山 2011）。そして、「長崎開港」という語を用いたのは、1932年の岡本良知氏の『長崎開港以前欧舶来往考』を挙げられている。

しかし、管見のところ、「長崎開港」という語が使われているのは、最初の長崎県図書館長であった永山時英氏（1867-1935）で、1926年に古賀十二郎氏との共著の『長崎と海外文化』（長崎市役所）のなかで「第六章 開港前の長崎町」、「第七章 長崎の開港」とされている事例がもっとも古いようである。それ以前の荒木周道氏（1840-1910）、金井俊行氏（1850-97）、香月薫平氏（1868-95）の著作には、「長崎開港」という言葉は見受けられないことは注意すべきである。この「長崎開港」という言葉が出現したことは、その概念が生み出されたということであって、「長崎開港」という言葉がどのような社会的背景、歴史観のもとで出現したのか、検証していく必要がある。そのことによって、「長崎開港」という言葉の歴史的意義付けができると考えている。

**註7** 山崎信二氏は、『長崎キリシタン史』のなかで、純忠と結んだ「必要な協定」について、「純忠が十年後に長崎を教会に譲渡する時の事項を参考にすれば、長崎の町最終的な支配権・裁判権は純忠にあるが、町および港の運営については基本的にイエズス会に任せる、ポルトガル船の入港・停泊税および外国からの輸入品に対する税（関税の初歩的なもの）は大村純忠に帰するといった内容ではなかろうか」と想定している（山崎 2015 P. 10）。

中世後期の宗教社会史の神田千里氏が、『戦国と宗教』（岩波新書）のなかで、「横瀬浦開港」について簡潔にまとめている。「長崎開港」についても同様な経緯があったことが推察される。以下に記しておきたい。

平戸で起こったトラブル以来、コスメ・デ・トルレスはルイス・デ・アルメイダに指示して、大村領内にポルトガル船の停泊地を探させた。フロイスによれば、アルメイダの指図によりポルトガル人水先案内人ドミンゴス・リベイロと日本人キリシタンのゴノエ・バルトロメウの二人は秘密裡の調査を行い、横瀬浦の好条件を確認して、大村家家老朝長純利と交渉し、宣教活動を容認する旨、内諾を得た。

さらに大村純忠との間で、修道士を領内で受け入れ、教会の建設を承認し、教会の財源として横江浦の地を寄進することが約束され、1563年大村純忠は受洗し、教名をドン・ベルトラメウと名乗った。その後およそ20年間に七万人余りが改宗する。（神田 2016 P. 98）

**註8** 安野氏は、日本商人の利用した〈外町〉の船着場は「船津町」だったとし、「外町」は日本各地から貿易港長崎にやってきた「諸国商人」向けの「船宿」の町であったと評価している（安野 1992）。

**註9** 安野氏は、元龜二年（1571）の「町割り・開港」が大村純忠・有馬義鎮・イエズス会三者による（安野 1989）として時期区分に（1）大村・有馬両主時代（元龜二年の春）を設定している（安野 1974・1992）。しかし、外山氏は、大村氏領に対して元龜二年以前から有馬氏の宗主権が及んでいたことを指摘しており、安野氏が言う元龜二年春の一時期のみが大村・有馬両主時代というのには賛成できないとされている。また、安野氏が時期区分としてあげている（3）佐賀領時代（天正五年－天正八年）についても、外山幹夫氏はなぜ長崎が「佐賀領」にならねばならないのか理解しがたいと指摘している（外山 2011）。

#### 【引用参考文献】

- 赤瀬 浩 2005 『株式会社 長崎出島』 講談社選書メチエ・講談社  
安野眞幸 1974 「中世都市長崎の研究」 『日本歴史』 第310号 吉川弘文館  
安野眞幸 1989 『伴天連追放令』 日本エディタースクール出版部  
安野眞幸 1992 『港市論』 日本エディタースクール出版部  
荒木周道 1913 『増補訂正 幕府時代の長崎』 長崎市役所（名著出版 1973、原本は1901年）  
板橋 勉 1971 『南蛮船がきたころ』 至誠堂新書・至誠堂  
岩崎義則 1999 「解題」 『長崎実記年代録』 九州文化史研究所史料集3 九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史研究所史料集刊行会  
越中哲也編 1960 『続長崎鑑』 長崎学会叢書第7輯 長崎学会  
越中哲也 1978 『越中哲也の長崎ひとりあるき』 長崎文献社  
越中哲也 1987 「解題」 『長崎拾芥・華蛮要言』 純心女子短期大学長崎地方文化史研究所  
越中哲也 1993 「解題」 『長崎集』 純心女子短期大学長崎地方文化史研究所  
小川幸司・成田龍一編 2022 『世界史の考え方』 岩波新書・岩波書店

- 太田勝也編 2007『近世長崎・対外関係史料』 思文閣出版
- 岡本良知 1955『文禄慶長年間の長崎』『南蛮屏風考』 昭森社
- 片岡弥吉 1989『長崎のキリシタン』 聖母文庫
- 片岡弥吉 2010『日本キリシタン殉教史』 片岡弥吉全集 星雲社
- 香月薫平 1893『長崎地名考』下之巻 旧蹟ノ部
- 香月薫平 1895『長崎古事集覧』 壺
- 加藤 章 1984『鎖国下の開港都市、近世長崎の社会と生活』『わが町の歴史長崎』 文一総合出版
- 金井俊行 1926『増補長崎略史』 長崎叢書(下) 長崎市役所(原書房 1973)
- 嘉村国男 1986『長崎町盡し』 長崎文献社
- 神田千里 2016『戦国と宗教』 岩波新書・岩波書店
- 古賀十二郎 1929『海外交渉中心地としての長崎』『開国文化』朝日新聞社
- 古賀十二郎 1957『長崎開港史』 古賀十二郎翁遺稿刊行会
- 坂井 隆 1998『『伊万里』からアジアが見える』 講談社選書メチエ・講談社
- 柴 秀夫編 1943『長崎鏡』『長崎遺響』 双林社
- 清水紘一 1991『史料 長崎町年寄発端由緒書』『中央大学論集』 第13号
- ジュリアン・バジジャーニ、ピーター・フォスル [長滝祥司・廣瀬覚訳] 2007『哲学の道具箱』 共立出版
- 陣内秀信 1992『東京の空間人類学』 ちくま学芸文庫・筑摩書房
- 武野要子 1975『長崎建立并諸記挙要』『日本都市生活史料集成』6 港町編I 学習研究社
- 武野要子 1982『長崎の港町』『講座 日本の封建都市』第三巻 地域的展開 文一総合出版
- 朝長敬一郎ほか 1988『續長崎鑑』(其の一) 『長崎総合科学大学紀要』第29巻第2号 長崎総合科学大学
- 朝長敬一郎 1995『長崎歴史漫歩』『長崎の風土と歴史』 長崎総合科学大学附属高等学校
- 外山幹夫 1981『大村純忠』 静山社
- 外山幹夫 1984『近世都市長崎への胎動』『わが町の歴史長崎』 文一総合出版
- 外山幹夫 2011『中世長崎の基礎的研究』 思文閣出版
- 中嶋幹起 2007『古賀十二郎』 長崎文献社
- 中田易直・中村 質校訂 1974『崎陽群談』 近藤出版社
- 中西 啓編 1973『長崎割記・元成日記・元仲日記』 長崎学会叢書 第9輯 長崎学会
- 中西 啓 1971『世界史の中の長崎』 木耳社
- 中村 質 1986『長崎の景観』『長崎県史 対外交渉編』 長崎県 吉川弘文館
- 永島正一 1977a『古地図で歩く長崎今昔』 武野要子編『長崎・平戸』日本の古地図14 講談社
- 永島正一 1977b『続・長崎ものしり帳』 長崎放送株式会社
- 永田信孝 1999『新・ながさき風土記』 長崎出島文庫
- 永山時英 1926『長崎と海外文化上』長崎市役所
- 永山時英 1928『長崎の開港』『長崎談叢』第1輯 長崎文献社
- 永山時英 1929『長崎と切支丹』『開国文化』朝日新聞社
- 成田龍一 2022『歴史像を伝える』 岩波新書・岩波書店
- 丹羽漢吉・森永種夫校訂 1973『長崎実録大成正編』 長崎文献叢書第1集第2巻 長崎文献社
- 丹羽漢吉 1974『長崎名勝圖繪』 長崎文献叢書第1集第3巻 長崎文献社
- 丹羽漢吉・森永種夫校訂 1974『長崎実録大成続編』 長崎文献叢書第1集第4巻 長崎文献社
- 丹羽漢吉校訂 1975『長崎虫眼鏡・長崎見聞録・長崎縁起略』 長崎文献叢書第1集第5巻 長崎文献社
- 簀先好紀 2004『天領長崎秘録』 長崎文献社
- 簀先好紀 2012『長崎地役人総覧』 長崎文献社
- パチャゴ・ディエゴ [佐久間正訳] 1964『長崎を開いた人』 中央出版社
- 原田伴彦 1964『長崎』 中公新書・中央公論社
- 原田博二 1999『図説 長崎歴史散歩』 河出書房新社
- 原田博二 2022『長崎奉行所西役所(西屋敷)』『長崎西役所跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第42集
- 福田忠昭 1937『長崎市史』地誌編名勝舊蹟部 長崎市役所 /再刊 清文堂 1967
- 布袋 厚 2009『復元!江戸時代の長崎』 長崎文献社
- 松浦直治 1970『長崎開港四百年 長崎の歴史』 長崎開港四百年記念実行委員会 長崎文献社

- 松浦直治 1974『増補長崎の歴史』 長崎新聞社・長崎史談会  
松田毅一 1970『大村純忠公と長崎甚左衛門』 親和銀行済美会  
松田毅一 1978『大村純忠伝』 教文館  
松田毅一・川崎桃太訳 1978『フロイス日本史』6 豊後編I 中央公論社  
松田毅一・川崎桃太訳 1979『フロイス日本史』9 西九州編I 中央公論社  
松田毅一監訳 1987『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第I期第1巻 同朋舎  
松本四郎 1983『日本近世都市論』 東京大学出版会  
宮崎清成 1930『崎陽秘史集覧』 青山堂書店  
村上直次郎 1938『長崎市史』通交貿易西欧諸国部 長崎市役所（再刊 清文堂出版 1967）  
森永種夫校訂 1976『長崎古今集覧』上 長崎文献叢書第2集第3巻 長崎文献社  
箭内健次 1957「近世都市長崎の形成」『史淵』第37輯 九州史学会  
山崎信二 2015『長崎キリシタン史』 雄山閣  
結城了悟 2006『長崎開港とその発展の道』 長崎純心大学博物館（『長崎談叢』第76輯 長崎史談会 2000）  
渡辺庫輔 1961「続長崎鑑に就て」『市立長崎博物館々報』第2号 市立長崎博物館  
渡辺庫輔 1964『崎陽論攷』 親和銀行済美会

## 『西海考古』第14号 執筆要綱

判 型：A 4判（幅210×長さ297<sup>ミリ</sup>） 書 式：横書き（45文字×40行） 余 白：上27<sup>ミリ</sup> 下・右・左：各25<sup>ミリ</sup>（多少、変動する可能性があります） 図 版：横160<sup>ミリ</sup>×縦240<sup>ミリ</sup>（多少の超過は可能です）  
題 名：明朝15ポイント 副 題：明朝12ポイント 筆者名：明朝12ポイント 本 文：明朝10.5ポイント 註：明朝9.5ポイント 文 献：明朝9.5ポイント 表・図版・写真などのキャプション：ゴシック10ポイント

内 容：論文・研究ノート・資料紹介・エッセー・近況報告など

※ 副題がある場合には題名の次行に記し、前後に罫線を付加します。筆者名と題名（副題がある場合は副題）の間には空行（1改行）を挿入してください。節の最終行と次節名との間には空行（1改行）を挿入してください。

※ 文献名は①執筆者（または編集者）、②発行年（西暦）、③「題名」、④『所収書名』、⑤巻次（シリーズ名等）、⑥発行者（発行機関）、⑦備考の順で記載してください。

※ 文中の記号や単位語は、原則として全角1文字での表記

ミリ キロ キン トン グラム トン ル 分 ヲル 秒 分 寸 などを用いてください。

※ 地名、遺跡名、型式名などで難解なものについては、ルビを付けてください。

※ 外字については印刷所に一任します。（個人的に作成した外字は、原則として使用できません）

※ 図版作成は番号・縮尺・方位・網掛けなど、執筆者側で可能な範囲でお願いします。

※ 原稿はできるだけデジタルデータで提出してください。

※ 図版に関しては、版下図版・データともに可ですが、挿入位置を原稿に明示してください。

※ 原稿は図版・表・写真などを挿入し、編集済のデータと、挿入した図版・表・写真の個別データも提出してください。

※ 打ち出し原稿の提出は任意とします。

1. 投稿先：西海考古同人会事務局 〒850-0874 長崎県長崎市魚の町6-15-902 古門 方

2. 投稿締め切り：令和5年9月末日（締切厳守）

3. 校 正：編集後、著者校正は原則1回

### 4. 註、引用・参考文献

#### (1) 註と引用・参考文献の区分

註と引用・参考文献は区別します。註は本文と関連する補助的事項を記し、引用・参考文献は、他著者の見解等を引用する際に必ず明記してください。

#### (2) 註の書き方

当該箇所<sup>①</sup>の文字に続けて括弧書きで示し、本文末番号順に記載してください。

【例】(本文中)・・・発見された(註1)

(本文末) 註1 このような発見例は長崎県で3番目である。

#### (3) 引用文献の示し方

他著者の文章をそのまま引用する場合は引用文を「」で明示し、本文中に括弧書きで著者名、出版年、該当頁を明記してください。引用・参考文献は本文末に著者ごとにあいうえお順で記載してください。

【例】(本文中)・・・「引用文」と述べている(古門 2021 p. 32)。

#### (4) インターネットからの引用

インターネットからの引用は、本文末の引用・参考文献欄に該当サイトのURLを明記してください。また、引用した日時を記してください。改訂が続いた場合、更新履歴を明示してください。

5. その他 ・図表および写真については、原則モノクロとします。

・折込図版は原則使用しないでください。